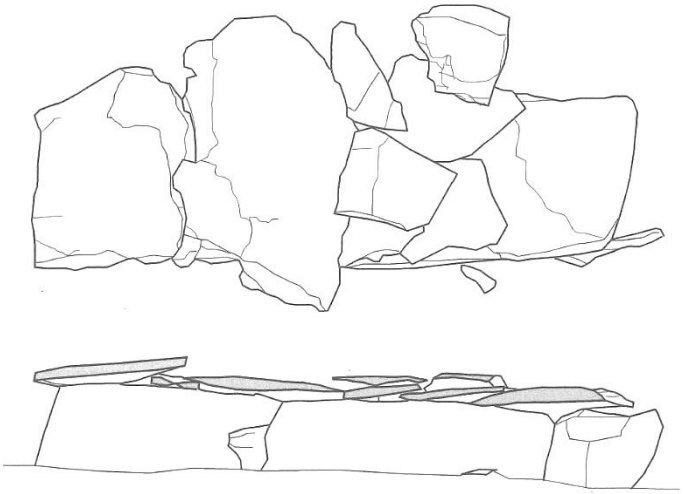
玉名市文化財調査概報

大原箱式石棺群

―玉名市岱明町野口における採土掘削工事に伴う緊急発掘調査の記録―

【令和 6 年度再編集版】

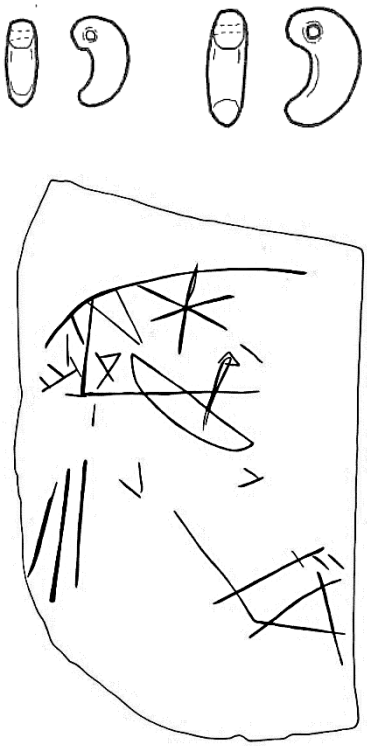


2024

玉名市教育委員会

大原箱式石棺群

―玉名市岱明町野口における採土掘削工事に伴う緊急発掘調査の記録―



例　言

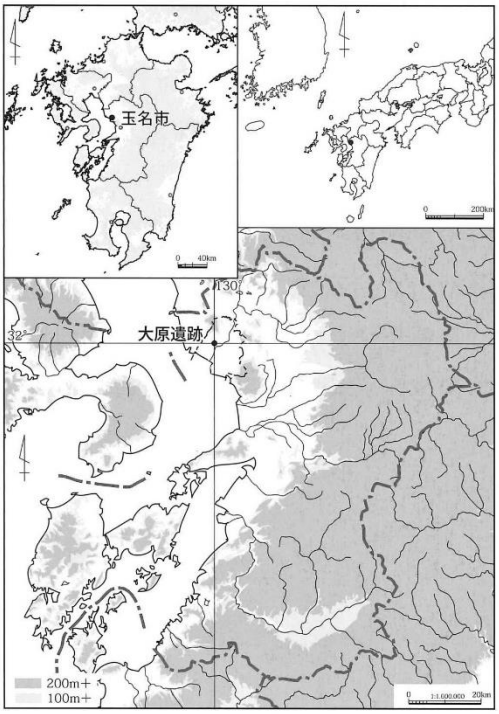
1　本書は、昭和 57 年 9 月、旧岱明町文化財保護委員であった田添夏喜氏によって発行された「大原箱式石棺群」の手製本や写真アルバム本などを再編集したものである。原本は公開されていなかったため、令和 6 年度に概要報告書として再編集を実施した。

2　本文は、基本的に原文のままであるが、一部常用漢字等に変換し、現在の用語へ表現を変えた部分がある。明らかに現在と異なる部分は修正・追記している。また、調査内容本文は、既刊の『浄光寺域確認調査』報告書の中から大原遺跡の部分を引用して補足している。実測図については田添氏本人が実測・製図したものを使用しており、再トレースは行っていない。ただし、16図の石棺及び遺物実測図は原図からトレースを行った（別途表記）。

　なお、調査位置図等が不足していたため、既刊の『大原遺跡』報告書から転載、追記するなど補足している部分がある。人骨調査の報文は、報告書が未完だったため『肥後考古』第 6 号にて発表されたものを再録している。

3　発掘調査は、当時建設されていた産業道路（現県道347号線）に関連する採土掘削工事によって発見された大原箱式石棺群の緊急調査であり、昭和42年5月20日から開始され、昭和43年2月25日に完了している。石棺群は、調査完了後に別の場所に移設復元されており、常時見学可能である。現在、石棺及び出土品は市指定文化財となっており、遺物の一部は岱明町公民館に展示されている。なお、当遺跡は日本遺産（米作り、二千年にわたる大地の記憶～菊池川流域「今昔『稲作』物語」）構成文化財の一つとなっている。

4　本報告書の本文・写真の再編集は玉名市教育委員会文化課の蜷父雅史が行い、文章テキスト入力など会計年度職員の松井和子、松下美樹が補助した。



目　　次

１　調査に至る経緯 …… 1
２　調査組織 …… 1
３　周辺の環境と調査概要 …… 1
４　石棺の保存対策 …… 7
５　石棺墓の調査 …… 8
　① 1 号石棺墓 …… 8
　② 2 号石棺墓 …… 9
　③ 3 号石棺墓 …… 10
　④ 4 号石棺墓 …… 11
　⑤ 7 号石棺墓 …… 12
　⑥ 8 号石棺墓 …… 13
　⑦ 9 号石棺墓 …… 14
　⑧ 10 号石棺墓 …… 16
　⑨ 11 号石棺墓 …… 17
　⑩ 12 号石棺墓 …… 18
　⑪ 13 号石棺墓 …… 19
６　大原箱式石棺群第 7 号石棺人骨について …… 20

７【追加報告】石棺墓周辺の調査 …… 23
　①住居跡群 …… 23
　②中世土壙墓 …… 28
　③大原箱式石棺墓の線刻画 …… 30
　④大原箱式石棺群と周辺の箱式石棺墓 …… 32
８　総括 …… 39
９　写真図版 …… 42

大原箱式石棺群　調査概要報告

１　調査に至る経緯

昭和 42 年春ごろ、産業道路（現県道 347 号線）の開設工事が進捗し、沿線の同町野口字大原 539 番地の畑地（約 300 坪）の採土工事にかかった。その後、地下約 70 ㎝下から 7～8 基の弥生後期の遺構が確認され、同年 8 月、岱明町（現玉名市）教育委員会によって発掘調査が実施された。調査は、昭和 42 年 5 月 20 日に開始され、最終的に完了したのは昭和 43 年 2 月 25 日であり、この間に住居跡群に併せて総数 13 基の箱式石棺が出土した。

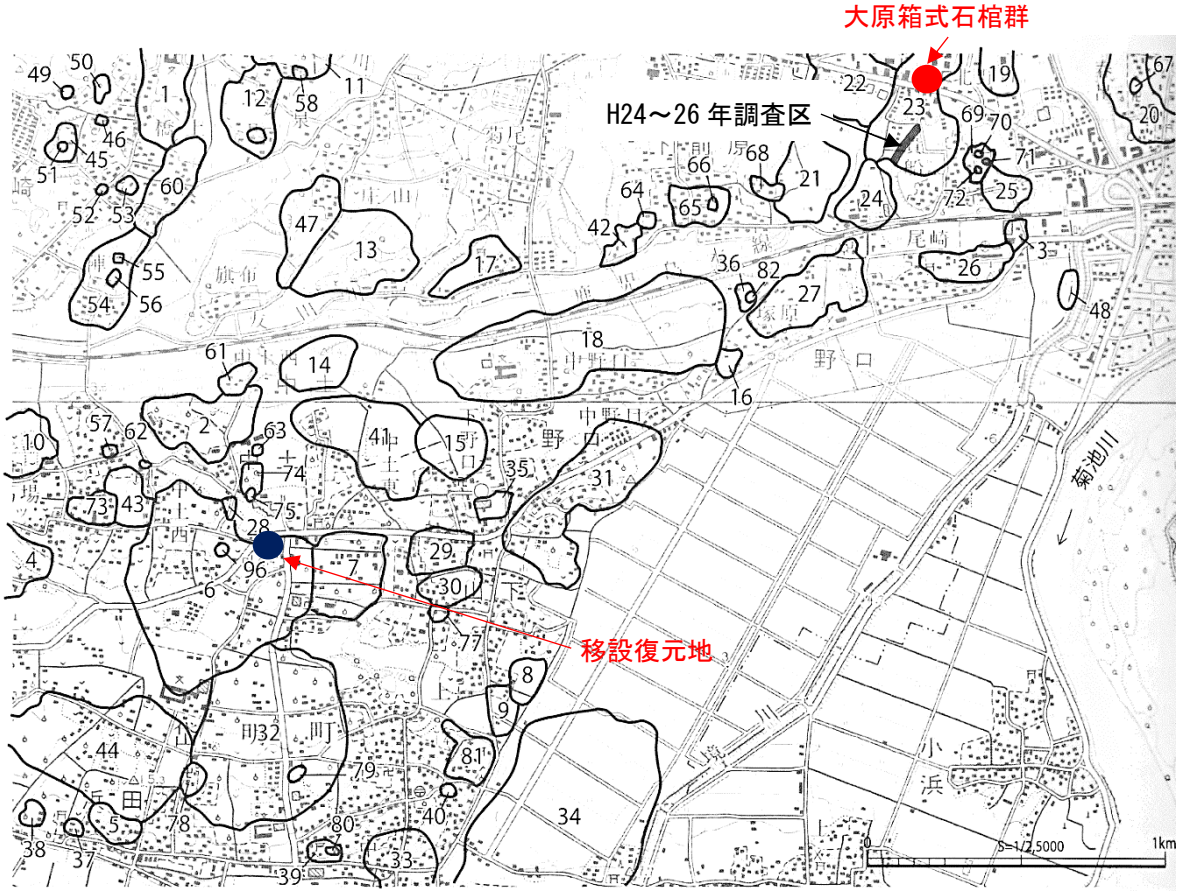
２　調査組織（昭和 42･43 年当時）

調査主体　岱明町教育委員会（現：玉名市教育委員会）
教育長　　斉藤　元
調査員　　田添夏喜（岱明町文化財保護委員会）
人骨調査　内藤芳篤（長崎大学医学部）
調査事務　岱明町教育委員会　社会教育課
　　岱明町中央公民館　田崎政信（公民館長）※移設復元管理
調査協力　玉名高等学校考古学部・米野信一（地権者）
調査期間　昭和 42 年 5 月 20 日～昭和 43 年 2 月 25 日

３　周辺の環境と調査概要

西南大門遺跡の南側に沿って、東西に通ずる旧三池街道を境界に、南側の台地一帯を大原遺跡とし、岱明町の行政区に入る。西南大門遺跡の南方 130mのところを、三池街道と平行に産業道路の名をもって新しく開設され、この新道に沿う北側の採土工事にかかって、弥生終末期の住居跡群と、13 基から成る箱式石棺群を主体とし、それらに付随して各種の土器、鉄器等多数の遺物を出土した。この土地の小字名を取って「大原（おおばる）遺跡」と命名されてはいるが、この遺跡はもともと西南大門遺跡と同じ地続きの、同じ遺跡であったことは同形式の箱式石棺が分布することで知られる通り、同一遺跡として成立したものである。それを二分したのは三池街道でいつの頃からかは全く不明だが相当に古い時代と考えられ、浄光寺南大門の遺構がこの街道に沿っているところからすると、南大門の創建された鎌倉時代にはすでに開通していたことが理解できよう。

分割された南側を大原遺跡として旧岱明町教育委員会を主体に、昭和 42 年 8 月を期して、本格的な発掘調査が行われた。ほぼ方形を形づくる遺跡の中で、西端に片寄って住居跡群が検出された。竪穴を設けるわけでなく、柱穴は多数確認されたにも拘らず、すべて配列状態が不規則のため、確実に住居の輪郭を把握することは不可能であり、床面一面に露出した土器など、中には完形品を含むものがあり、これらの遺物の配列状態に基づいて住居の範囲を決めるよりほかに方法は見出せなかった。こうして確実性に近いもの 4 戸が浮かび上がり、他に 3、4 戸くらいはあったか確実性に乏しく、遺物だけを採取

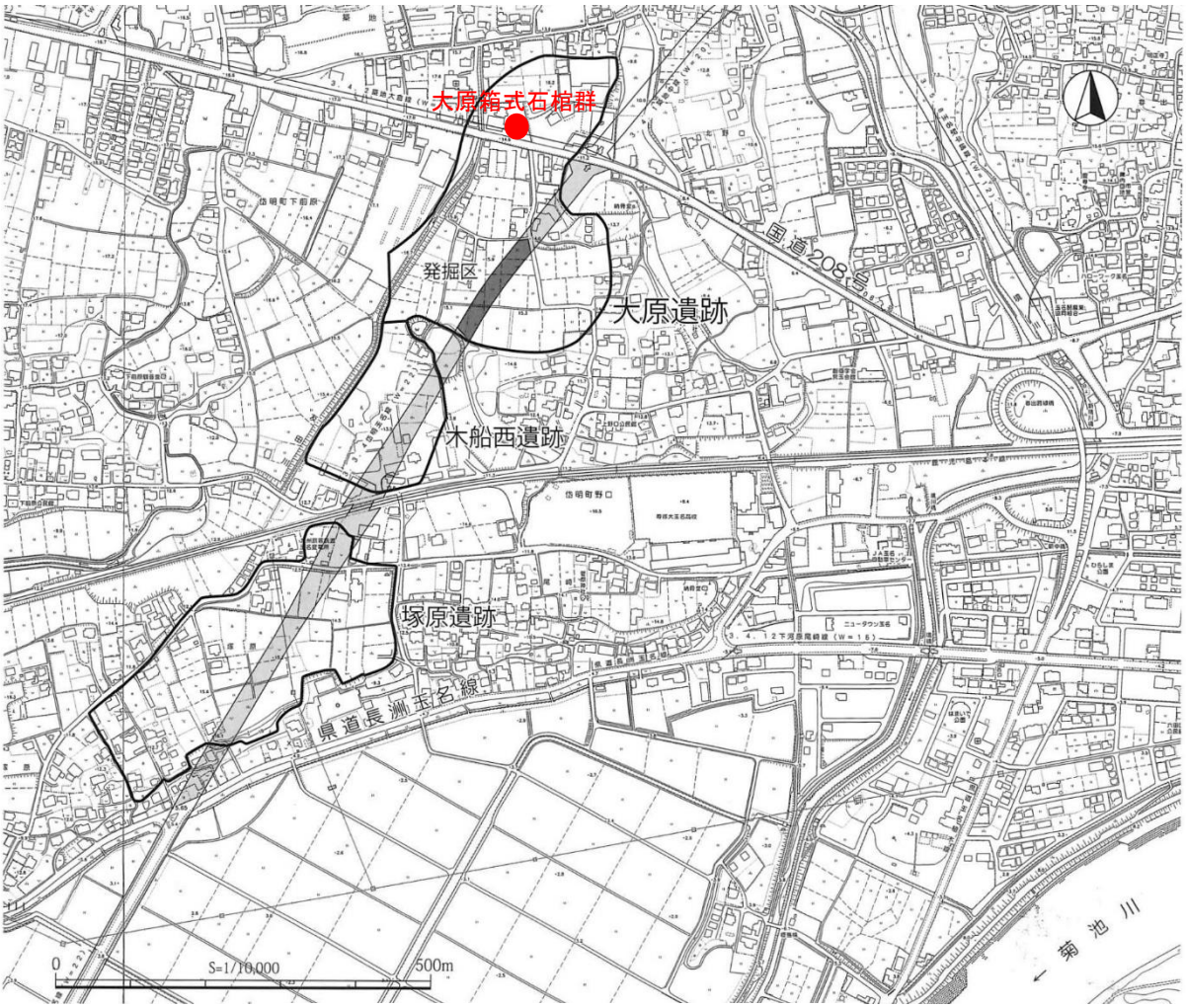


No.	遺跡名	時代
1	西松手遺跡	縄文
2	中土楢ノ尾遺跡	縄文～弥生
3	尾崎貝塚	縄文
4	目倉尾遺跡	縄文
5	浜田貝塚	縄文
6	中土遺跡	縄文
7	山下西遺跡	縄文
8	庄司貝塚	縄文
9	古閑原貝塚	縄文
10	中尾崎遺跡	弥生
11	今泉遺跡	弥生
12	今ノ本遺跡	弥生
13	東籏布遺跡	弥生
14	天神木遺跡	弥生
15	下野口遺跡	弥生
16	塚原石蓋土坑墓群	弥生
17	菊ノ尾天神木遺跡	弥生～古代
18	年の神遺跡	弥生
19	東南大門遺跡	弥生～古墳
20	春出遺跡	弥生・古代・中世
21	下前原遺跡	弥生
22	東原遺跡	弥生
23	大原遺跡	弥生～中世
24	木船西遺跡	弥生
25	木船東遺跡	弥生
26	尾崎遺跡	弥生・古墳
27	塚原遺跡	弥生～中世

No.	遺跡名	時代
28	中土貝塚	弥生
29	山下前畑遺跡	弥生・古墳
30	中道遺跡	弥生
31	山下木佐貫遺跡	弥生・古墳
32	幸長寺遺跡	弥生・古墳
33	石橋遺跡	弥生
34	イッチャンサン遺跡	弥生
35	野口前遺跡	弥生
36	塚原古墳	古墳
37	浜田西原古墳参考地	古墳
38	浜田吹上古墳	古墳
39	藤光寺古墳	古墳
40	弁財天古墳	古墳
41	東中土遺跡	古墳・古代
42	下前原遺跡	古墳
43	大跡遺跡	古墳
44	浜田西原遺跡	古墳
45	大悟山平等寺跡	古代・中世
46	大悟山平等寺毘沙門堂	古代・中世
47	籏布遺跡	古代
48	下河原条里跡	古代
49	西徳王丸五輪塔	中世
50	徳王丸屋敷跡	中世
51	伊勢守紀光隆の墓	中世
52	上の六地蔵石幢	中世
53	北清寺跡	中世
54	陣館跡	中世
55	陣の五輪塔	中世

No.	遺跡名	時代
56	満福禅寺跡	中世
57	万福寺跡	中世
58	吉宝寺跡	中世
59	岩倉山平等寺跡	中世～近世
60	上村城跡	中世
61	中土屋敷跡	中世
62	西中土五輪塔群	中世
63	願正寺跡	中世
64	浄幸寺跡	中世
65	築地次郎国秀館跡	中世
66	前原宗因の墓	中世
67	慶専寺古塔碑群	中世
68	正覚寺跡	中世
69	木船遺跡	中世
70	木船五輪塔	中世
71	森崎直次郎藤原定孝の墓	中世
72	森崎伊勢守貞長の墓	中世
73	内野城跡	中世
74	中土館跡	中世
75	中土の六地蔵石幢	中世
76	荒野尾五輪塔	中世
77	仏教寺跡	中世
78	無量山寿福寺跡	中世
79	幸長寺跡	中世
80	籐光寺跡	中世
81	高道城跡	中世
82	二仏庵跡	中世

第１図　　大原遺跡周辺の遺跡分布図

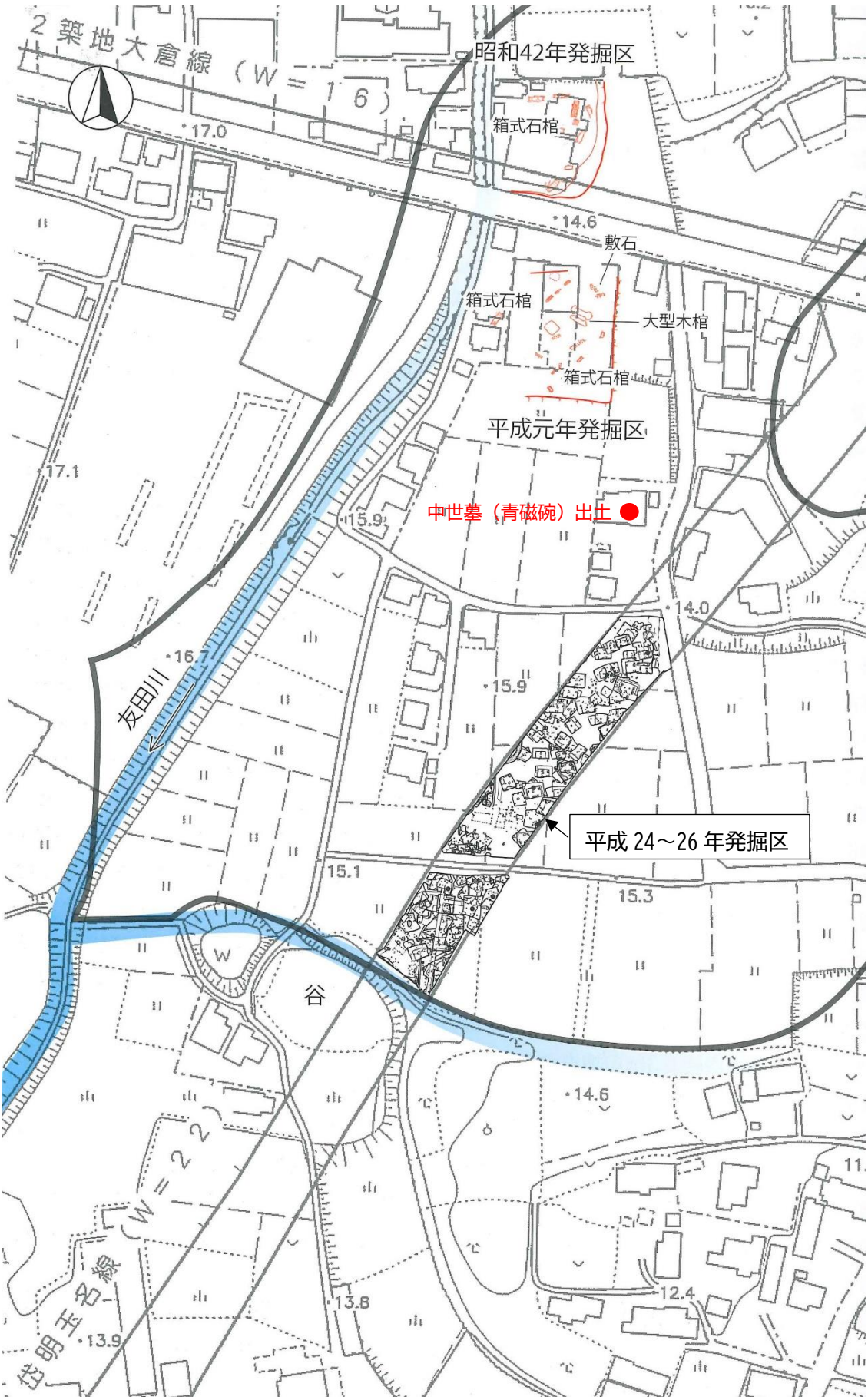


第 2 図　　大原箱式石棺群調査位置図

するに終った。なお調査区外で小川に面する低い崖面にも、多数の住居跡の徴候が見られたが、今回はこの方は断念して後の機会を待つより外なかった。

出土の遺物では多数の弥生晩期土器が主となり、完形品の高坏、丸底小型壷、円筒形用途不明の小形土器、瓢形の土製具、小さな坏形土製具等を始め、多数の断片があり、これらの中には刷毛を使用したような波状文や、緩やかな流水文を施すもの、それらに加えた低い丸形の施文のあるもの、斜平行線を正交させた刻文で口縁外を飾るもの、斜平行線を小刻みした幅広の突帯 1 条を肩のあたりにめぐらすものなど様々あって、この時期によく台頭する土器文の多様化した様相を見るものが多い。完形高坏では、平地住居の 1 つの床面で、片方に寄せて器台の大きさの穴を掘って脚部を埋め、露出した坏の中に完形瓢形土製品をはじめ、小形土器の断片を山高に盛ったのが出土した。このほかに割に多いのが同形高坏脚部、小形碗 2 個が挙げられる。遺物中鉄器 6 点が含まれ、鉄斧 1、鉄鏃 2、鉄鎌 2（いずれも欠損)、和釘 1 が含まれる。すべて小形である、というのがこの遺跡の特徴である。

大原遺跡の性格が平床式の住居群に併せて、箱式石棺を主体とする総数 13 基の埋葬施設である。一辺 15m四方の広さの中で、西端部に集中して位置をとる住居跡に対して、東寄りに大小 10 基、北寄りに大形 2 基の箱式石棺がそれぞれ位置を占め、残りの大形 1 基は、国道 208 号線を超えた 15mの南方に配置され、いずれも安山岩の割石を箱形に組んで築かれる。第 1 号棺は板状自然石 12 個を組み、全長



第 3 図　　大原箱式石棺群周辺図

1.05m、幅が頭部で 50.5 cm、深さ 18 cmの大きさである。棺内には鉄鏃 1 本が納められていた。頭部を西南方に向け、その右側と後部左側にそれぞれ 1 基ずつの小形陪塚棺を従えていた。第 7 号棺は蓋石で覆い、更にその上に無数の割石を積み、東西方向に埋葬され、内部に濃厚に朱粉が敷かれた中には主体男性人骨 1 体が頭を西に、仰臥伸展の姿に埋葬されていた。

「玉名郡岱明町字大原出土の大原箱式石棺群第 7 号棺人骨は男性、壮年骨と推測される。脳頭蓋ではやや長頭の傾向がうかがわれ、顔面頭では幅径が多少小さいようである。四肢骨は太くて頑丈であり、大腿骨では柱状形成の像が認められる。以上を要するに、本人骨は古墳人としては骨格が大きく、扁平性や柱状形成など古い形質をとどめているものである」とは大原人骨の調査担当者、長崎大学医学部第 2 解剖学教室、内藤芳篤教授の調査所見である。

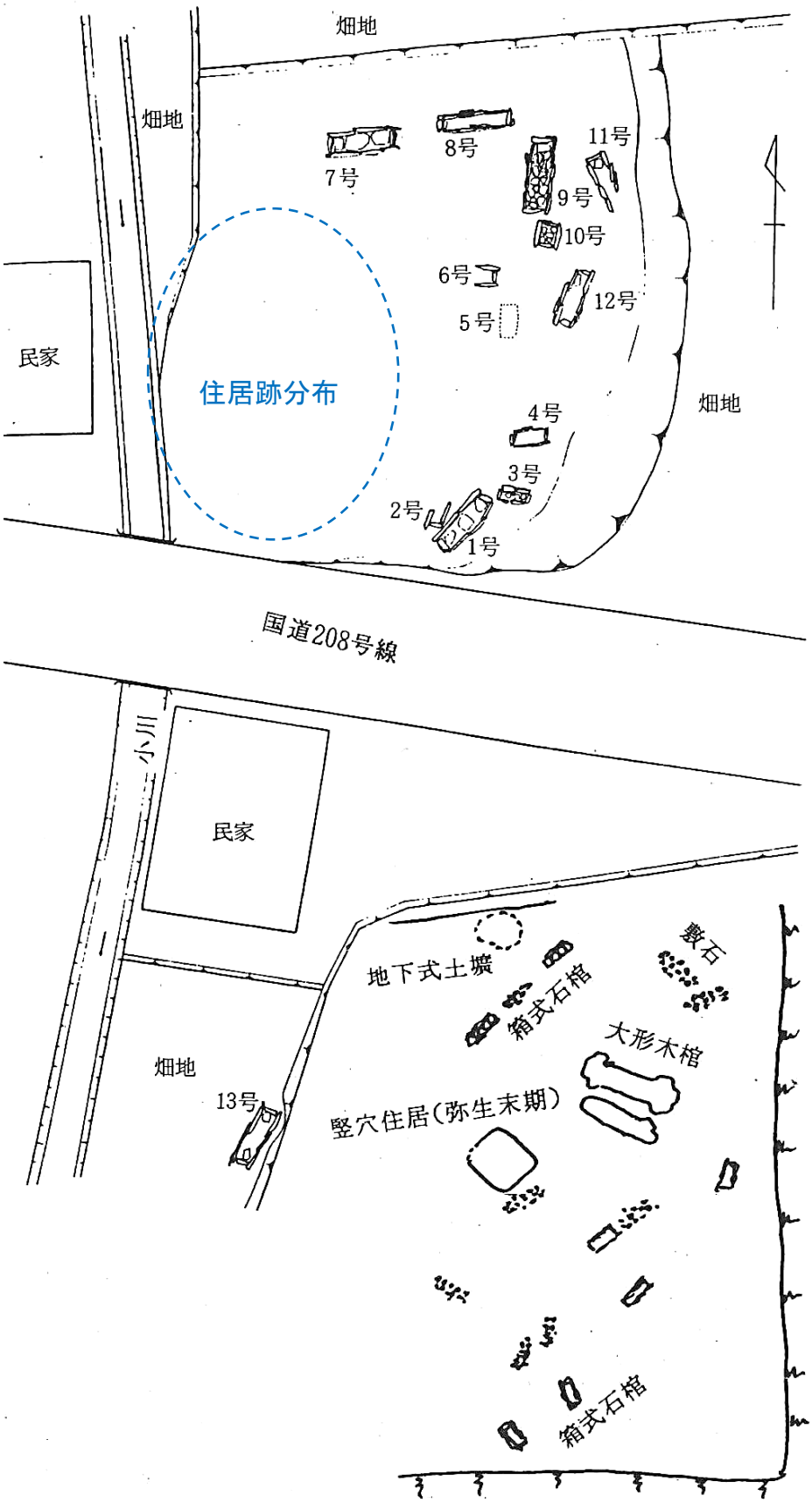
この石棺は板状自然石 20 個を箱型に組み全長 2.10m、頭部で横幅が 70 cm、深さが 40 cmを測り群中で最大の規模を持っている。また第 9 号棺は、東辺の北寄りに位置して出土し、小割りした板状石 18 個を棺側に用いて、同じ石材 21 個を敷き並べて床面をつくり、同じ石 10 個を北端に重ねて枕とした。内部に人骨の遺存は見られなく、中央の左側寄りの床上に鉄鏃 1 本の副葬があった。中央部に位置する右側の石面には、太陽（または星か）の下に笠を被り小舟に乗って竿をさす絵が線刻される。後期古墳に多く見られるこのような絵画が箱式石棺に施された例は極めて珍しいものである。棺の全長が 1.14 m、前部で横幅が 67 cm、深さ 35 cmを測る大きさである。また後部右側には小形棺 1 基の陪塚棺を従える。

大原遺跡の発掘調査が行われた翌年には、産業道路（現県道 347 号線）の南側一帯が圃場整備の土木工事が開始された。その工事にかかって出土したのがこの第 13 号石棺である。それは昭和 43 年 3 月のことであった。蓋石は 1 部を残し多くが機械に引っ掛って剝ぎ取られ、棺身は完全に残っていた。すべて安山岩の自然石を用い、板状石 8 個をもって棺廓を箱形に組み、小割り石 7、8 個を用いて継ぎ目を塞ぐ。床は粘土を敷き固めた上に、8 cmほどの厚さに朱粉を敷き、人骨は早くに削減したらしく、全く認められなかったが、枕石と見られる板状石が棺内の両端に 1 個ずつ置かれ、南端の枕石付近に大小 2 個の瑪瑙勾玉が、また東側壁の中央部に接して、完形刀子 1 本がそれぞれ配されていたが、これらの副葬品は石棺の年代を判定するうえで、最も重要なものである。

この頃になって地形も変動して、確実な位置は解し難いが、昭和 24 年 1 月、学校は 3 学期のはじめ新設の産業道路を、当時旧玉名高等女学校跡の 1 部を借用して置かれた。当時の岱南第 1 中学校へ通学の途中、大原付近の住宅用地造成の現場から、同校 2 年の女生徒が届けた弥生土器 2 片がこの遺跡発見の端緒となって、大原人骨へと発展した。当時、後になって第 13 号石棺の出土した付近は土取り場として利用され、土を採取した低い崖面に、頭骨の半分ほど露出した土葬のままの人骨 1 体が発見された。

麦畑の地表下 70 cmの深さで、長さ 3mに及ぶ土壙を舟底形に堀り窪め、その中に頭部を北にした南北方向で、仰臥伸展の体位をもって埋葬され、骨格は左手、左足先、右脛骨を失うほかよく揃っていて、土葬のままの人骨としては遺存状態はまことに良好であったことが言える。人骨を覆う黒色を呈する粘土質土に混入した多くの土器片は、人骨の時期を知るための資料ともなる。

この人骨の出土地点より東南方へ 80mの同じ地続きに 1 民家がある（玉名市岱明町野口 551-3）。住宅新築に際して、昭和 34 年 8 月 25 日、トイレのマンホールを設置する穴を掘開中に、地表下 70 cmほどの深さに及んで、土師器皿 7 個とともに磁器腕同形 2 個を掘り当てた。共に口縁の直径 17 cm、



第 4 図　　大原箱式石棺群遺構配置図

(『歴史玉名』第 3 号 1990 から引用追加)

高さ 7.3 ㎝、高台を付ける。口縁は 5 等分して小さく刻みを入れて 5 弁形にする。内面に片切彫りの手法をもって器底の円周方向へ、浅い湾曲の 2 平行線を画し、画内に 2 段に重ねた右巻雲文を配する模様を施す。中国龍泉窯系（12 世紀後半）の青磁画花弁文碗である。青磁碗は 12～14 世紀まで全国的に普及しており、県内各地の中世遺跡の出土するこの種の例は少くない。

大原遺跡ではこれらのほかに、圃場整備事業で、この畑地一帯から南の方に及んで、弥生中期から終末期に渡る遺物の集中、または継続的に分布することが明らかにされ、小川を隔てた西に隣りする市場弥生遺跡や、更に西方 300m一帯に繋栄した、下前原住居集団遺跡と併せて、弥生後期に鉄器を造り駆使した。進歩的な種族の一大文化圏があったことをよく知ることができる。

４　石棺の保存対策

大原の石棺が同町内始めての出土であり、数量も多く学術的意義が深いところから、旧岱明町教育委員会ではこれを永く保存し、学術応用を計るため、同年 8 月棺材を移し、現在地に復元したものである。13 基のうち第 5、第 6 号棺は破損が甚だしく、棺材も散逸していたため、この 2 基を除いて、11 基が復元されている。しかし、石棺の配列については出土状況の配置まで再現したものではない。

移設先　玉名郡岱明町中土　975 番地　岱明町中央公民館

（１）　現在、東西 16.50m・南北 13.00m（214.5 ㎡）を敷地とし、その周囲に玉造りの樹木、または唐かえで、銀杏、まさき等を植栽して環境を整備するなど、適切な配慮がなされている。

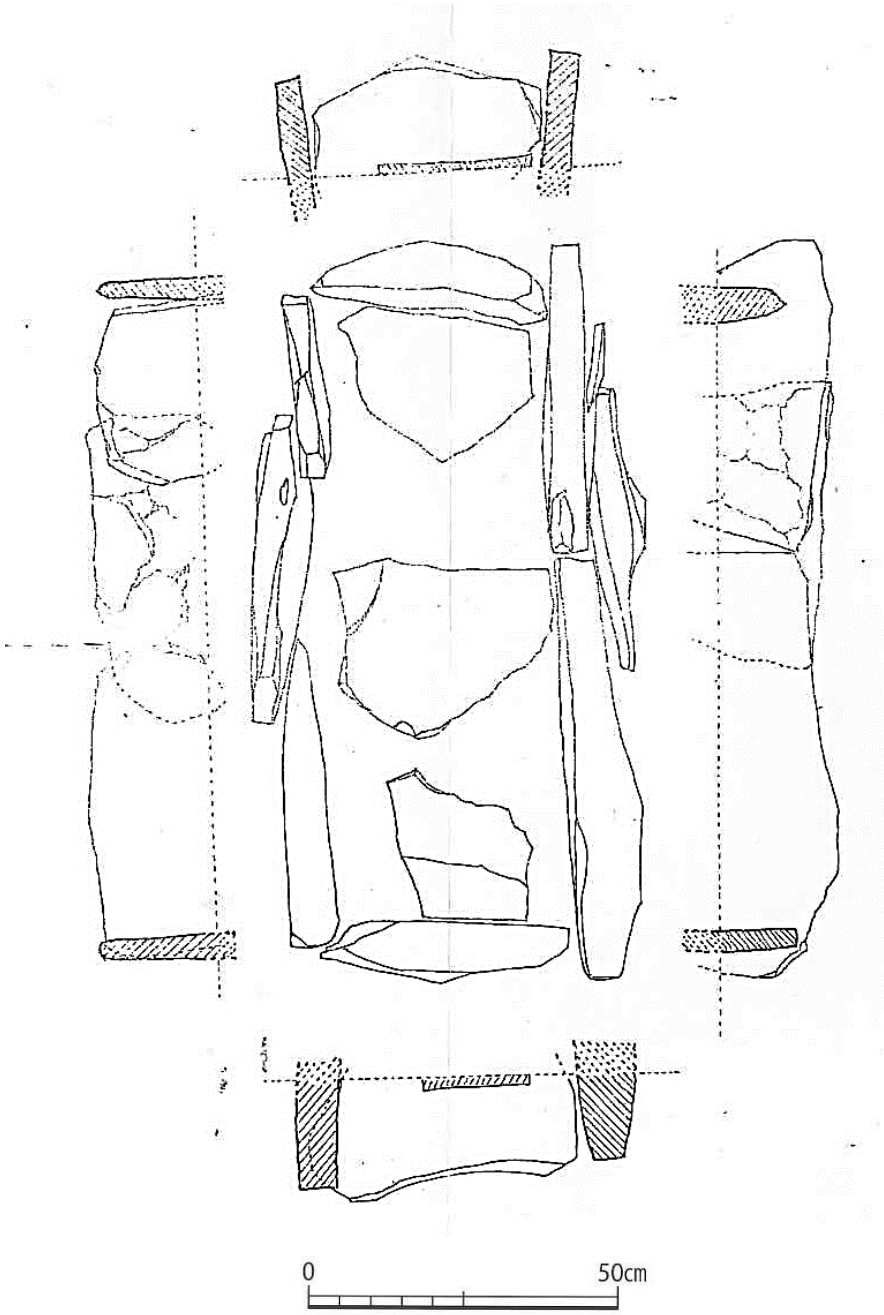
（２）参考文献　1.大原遺跡発掘調査の田添夏喜メモ帖　　昭和 42 年 8 月
2.玉名市玉名岡箱式石棺群の田添夏喜メモ帖　昭和 40 年 4 月
3.玉名市滑石小路箱式石棺の田添夏喜メモ帖　昭和 57 年 9 月

移設後の大原箱式石棺群（令和 6 年現在）

５　石棺墓の調査

①　１号石棺墓

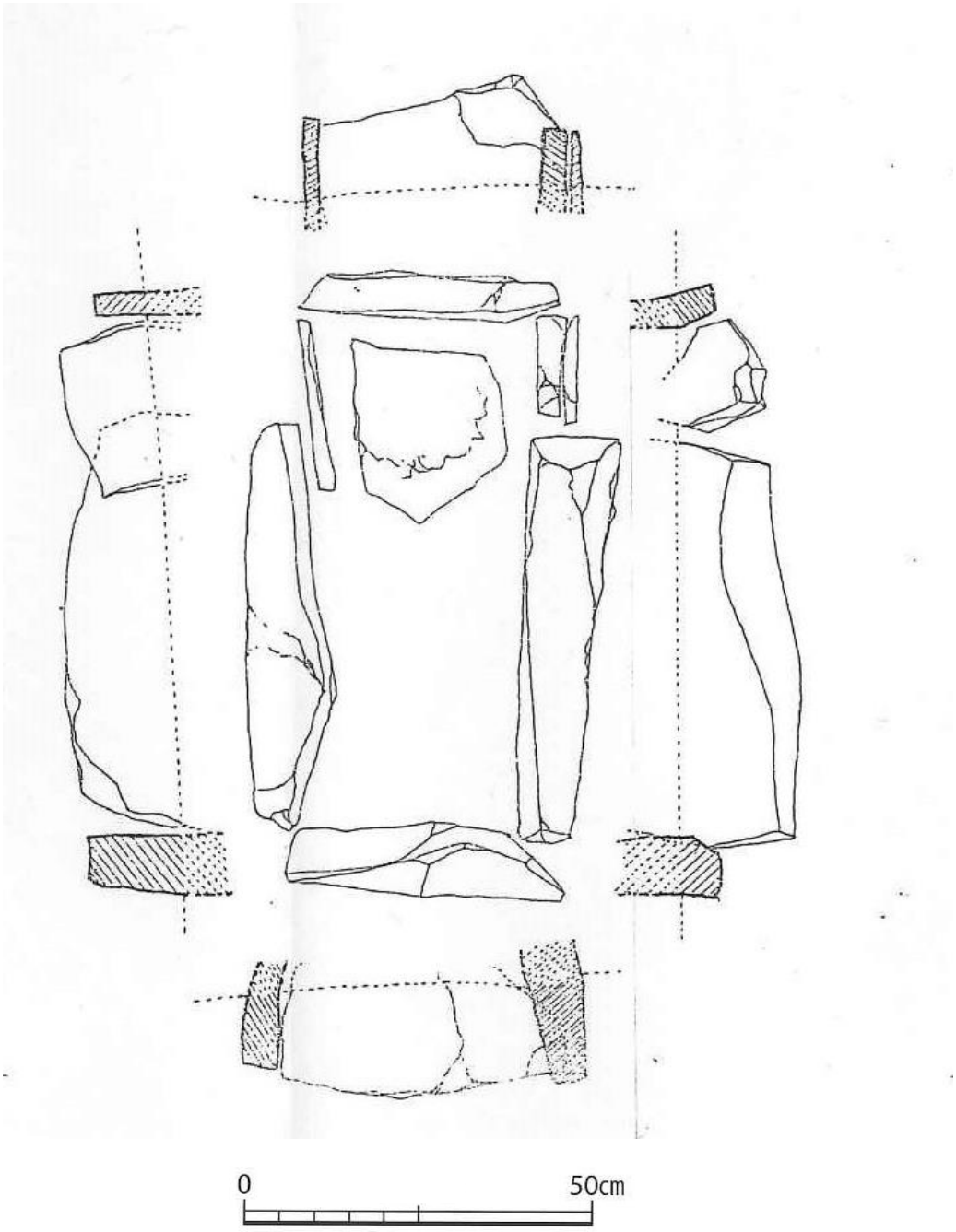
調査区の最南端（旧国道沿い）で検出した石棺で、2・3 号棺と接している。主軸は北東－南西方向に設置されるが、人骨が残存していないため頭位は不明である。安山岩の平たい自然石 11 個を用い、そのうち 8 個は縦 95 ㎝・横幅 40 ㎝・深さ 18 ㎝の大きさにとって立て、他の 3 個は内部の床に敷く。やや小形に造られていて、普通形に比べ中形の大きさである。小児を埋葬した可能性もある。副葬品の出土はなかった。



第 5 図　１号石棺墓実測図

② 2号石棺墓

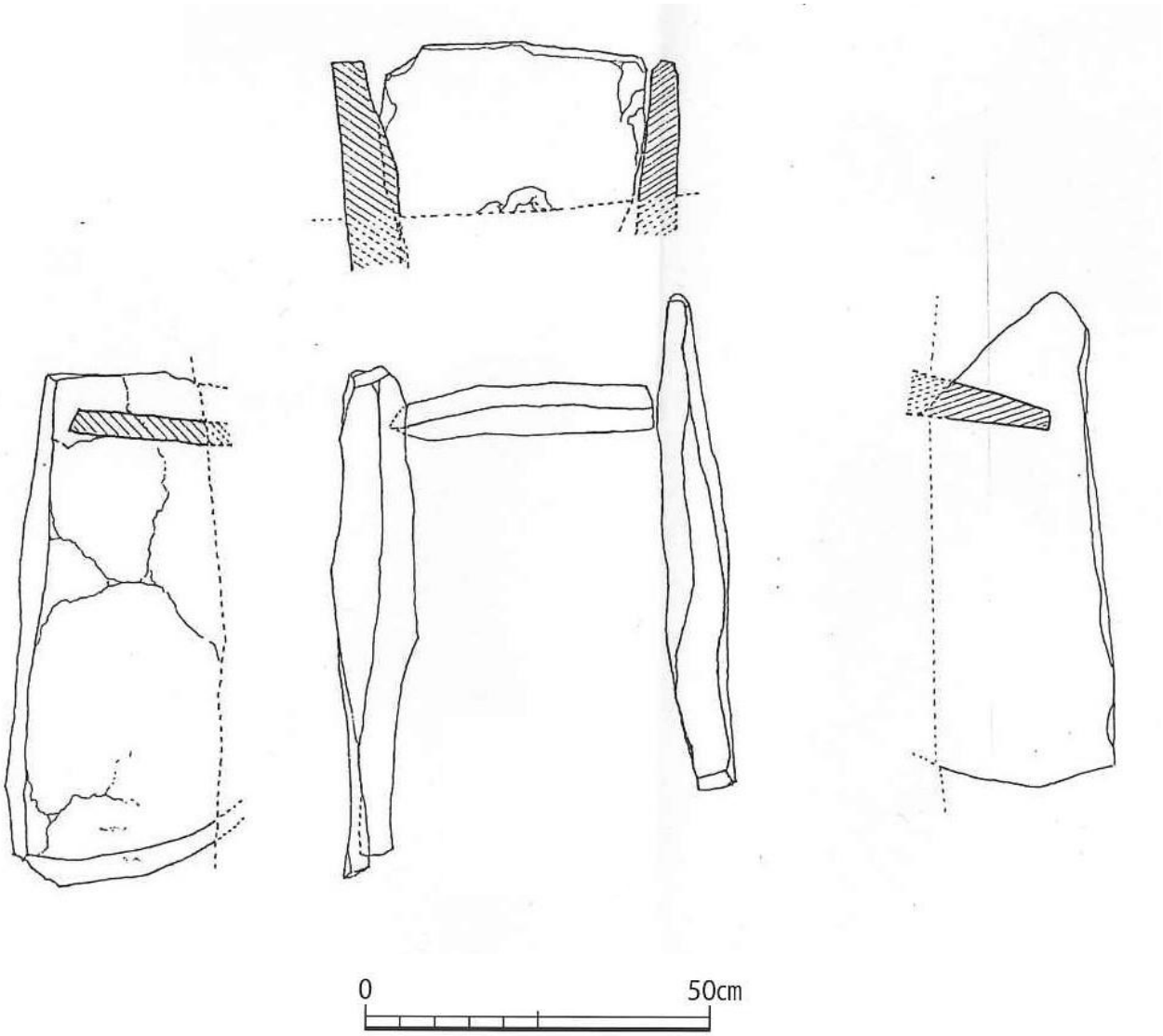
調査区南東端で検出され、4号棺の北側に位置する。主軸はほぼ東西方向に設置されており、頭位は不明である。安山岩の平たい自然石7個を用い、縦70㎝・横27㎝・深さ15㎝ほどの大きさに組んで棺体をつくる。幅の狭い方の床上に1個を敷くため、こちらが頭位だった可能性もある。第1号棺よりもさらに小形になっているが、出土物がないため、小児用であるか再葬か、また他の何かを納めたものか不明である。



第6図　2号石棺墓実測図

③ 3号石棺墓

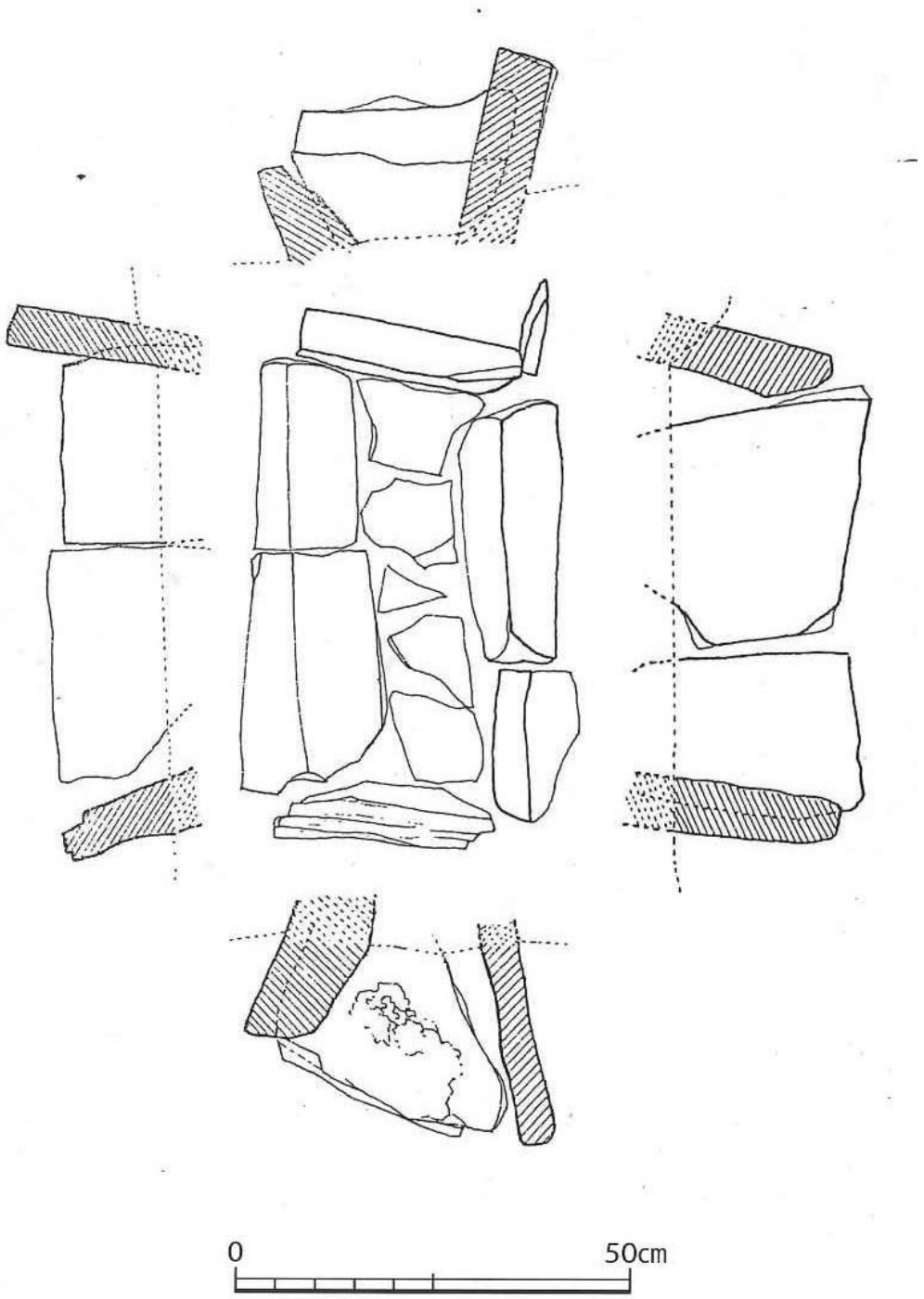
調査区南端で検出され、1号棺と接している。後世の破壊にあい、北側は欠損しているため、全体像は不明である。主軸はほぼ南北方向であったと考えられる。安山岩自然石の3石をわずかに残すのみで、幅33㎝・深さ25㎝という以外、棺の規模に関して知るすべもないが石材の大きさなどから推して本来は結構な大きさを有していたと思われる。出土遺物はなかった。復元に際しては、出土状況のまま、3石でコの字型に復元している。



第7図　3号石棺墓実測図

④ 4号石棺墓

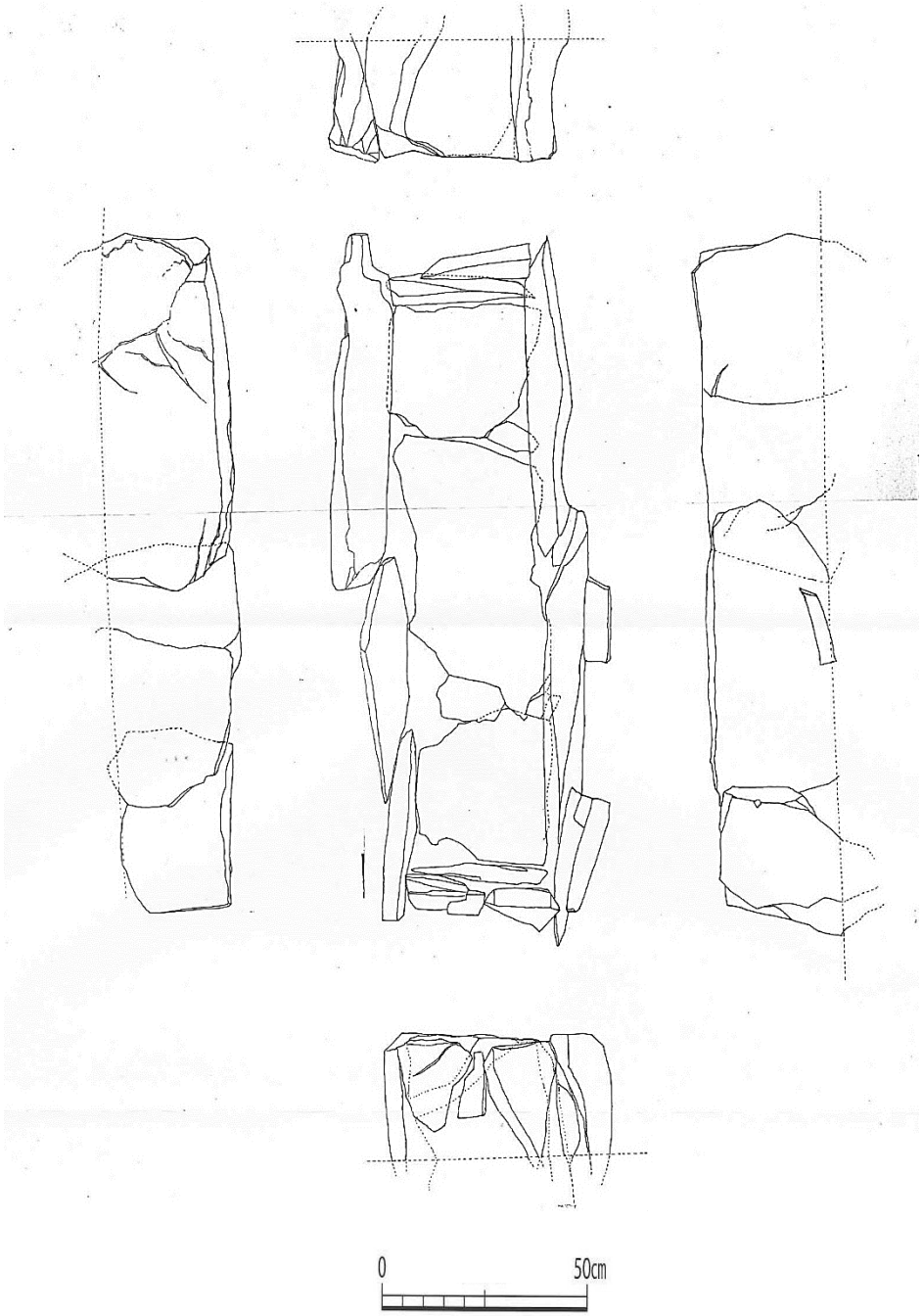
調査区の南東側で検出され、1号棺と2号棺の間に位置する。主軸はほぼ東西方向であり、頭位は不明。安山岩の自然石6個をもって長さ65㎝・幅32㎝・深さ26㎝の大きさに立てて棺郭をつくり、内部の底に平石5個を敷き並べて床とする。小形ではあるが確実な構造をとる。これも小児を埋葬した可能性があるが、床まであまり隙間がないよう丁寧に敷き詰められている。側石が厚く太い。



第8図　4号石棺墓実測図

⑤ 7号石棺墓

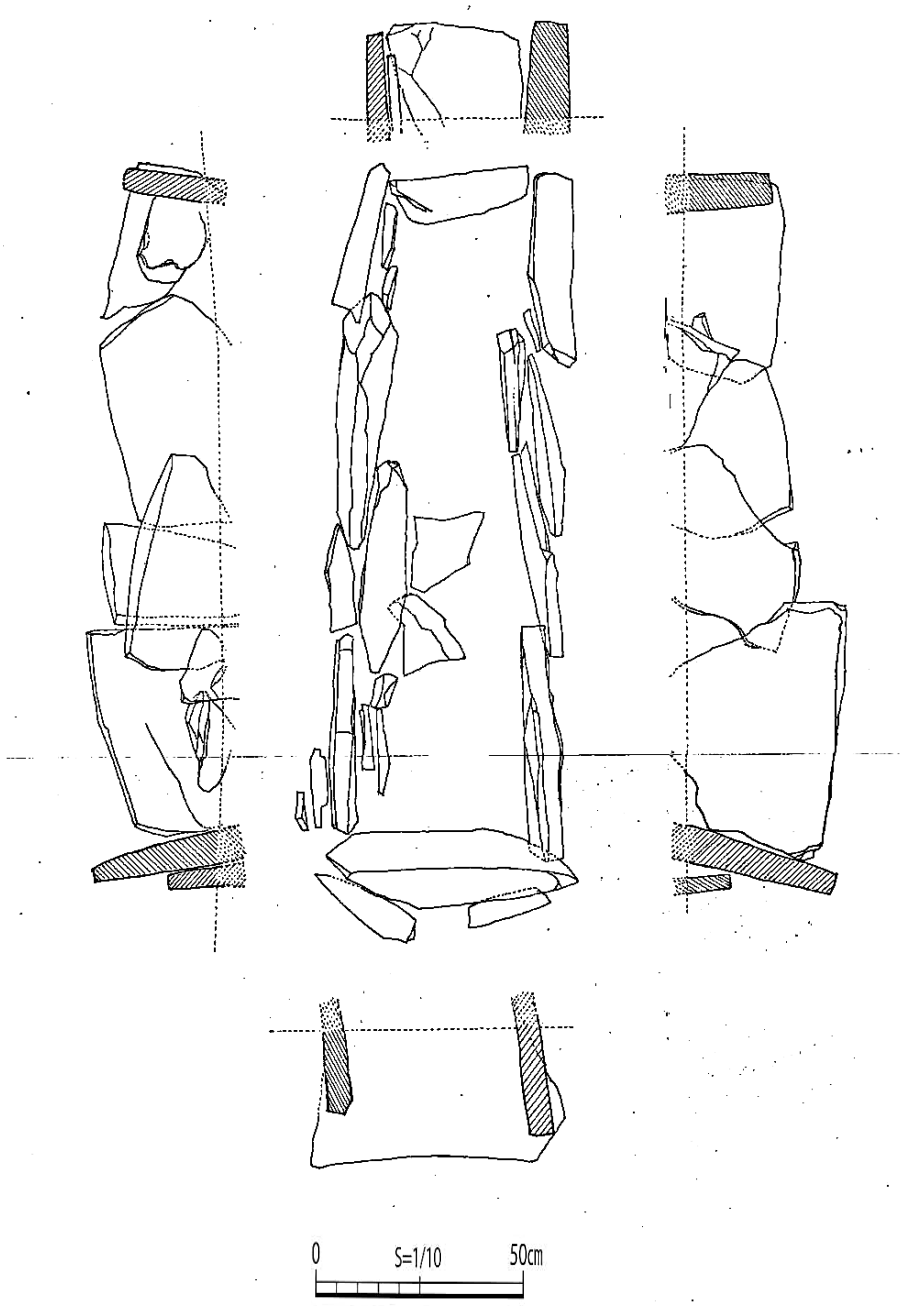
5・6号墓は、調査区の中央付近で検出されたが、後世の攪乱が著しく保存状態が良好ではなかったため、位置のみを記録するに留めた。よって、移設復元も行っていない。7号墓は、調査区北西端で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。板状安山岩の自然石大小12個を用い、縦170㎝・横40㎝・深さ40㎝ほどの大きさに棺体をつくり、底に広い平石3個と小石2個をもって床敷とする。発見当初内部全面に朱（酸化鉄）を塗抹し、床上には濃厚に朱粉が敷かれ、成人男性1躯を埋葬。頭・四肢骨等、遺存状態は比較的に良好であった。長崎大学医学部第2解剖学教室に移管。人骨については後述している。



第9図　7号石棺墓実測図

⑥ 8号石棺墓

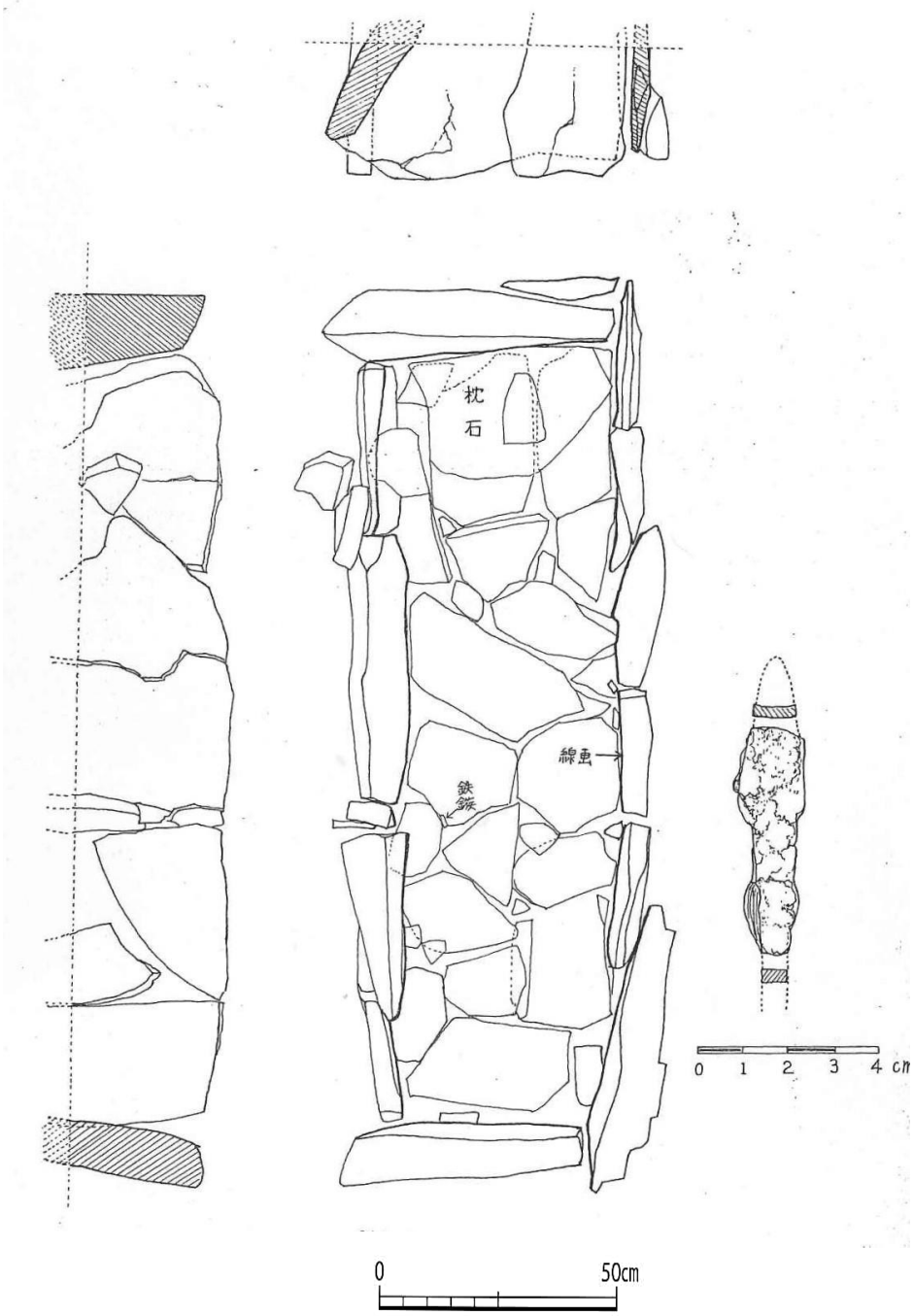
調査区の北端で検出され、主軸はほぼ東西方向である。人骨残存しないため頭位は不明。安山岩の板状自然石大小20個を用い、縦155㎝・横幅44㎝・深さ32㎝ほどの長方形に組んで棺体をつくり、床面中央の左側に2個の石を敷く。或程度の大きさを保ち、細長い形状をしている。成人を葬ったものであろう。副葬品は出土していない。



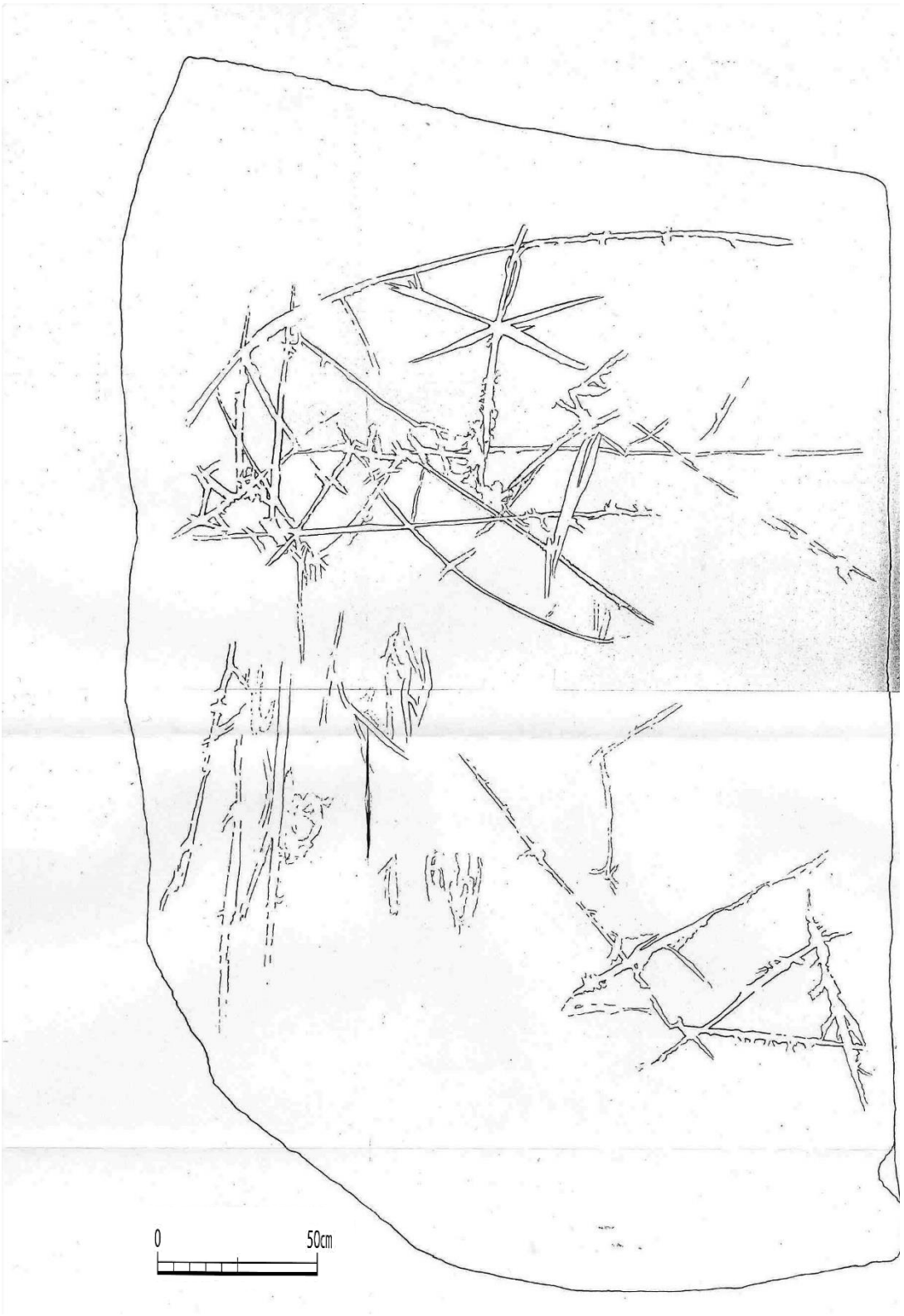
第10図　8号石棺墓実測図

⑦ 9号石棺墓

安調査区の北東側で検出。安山岩板状自然石大小17個を縦170㎝・横45㎝・深さ35㎝ほどの長方形に組んで棺郭とし、平石23個を底面に敷き詰めて床をつくり、幅の広い方の側石に接近して平石1個を重ね、枕としている。中央部の右腰に当る付近に鉄鏃1本が副葬されていた。また左側壁中央石の内面には、線描による棹をさす小舟と、その上に燦燦と輝く太陽を現すと思われるものを主体とする戯画的な表現の絵が認められる。このような箱式石棺に壁画が伴う例は県内でも他にない珍しいものである。石棺の規模も群中最大を示し、被葬者は一族中最高の地位にあった人であることが察知される。



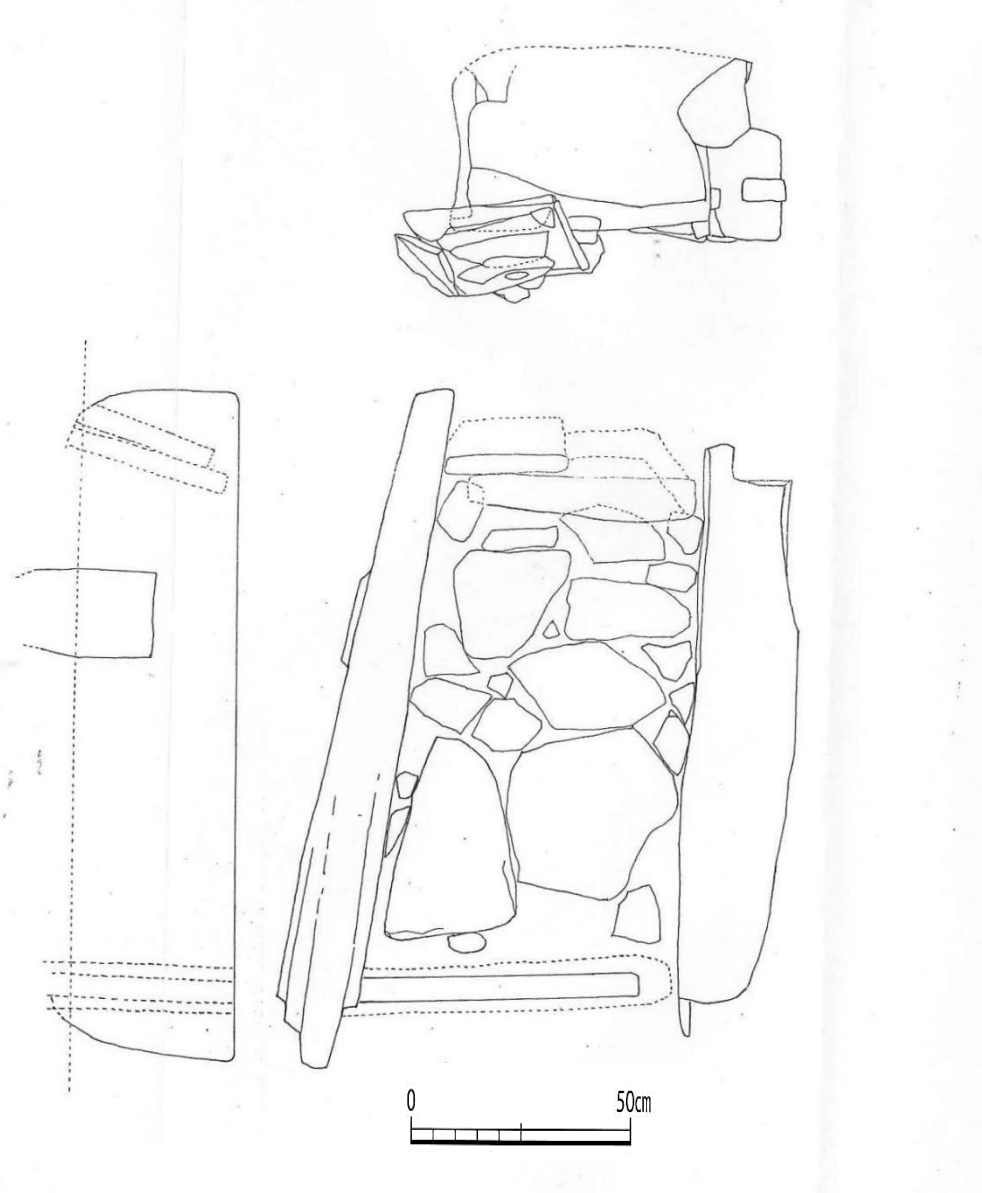
第11図　9号石棺墓実測図



第 12 図　　大原遺跡出土箱式石棺群　　9 号石棺墓
線刻図　（転写図）

⑧ 10 号石棺墓

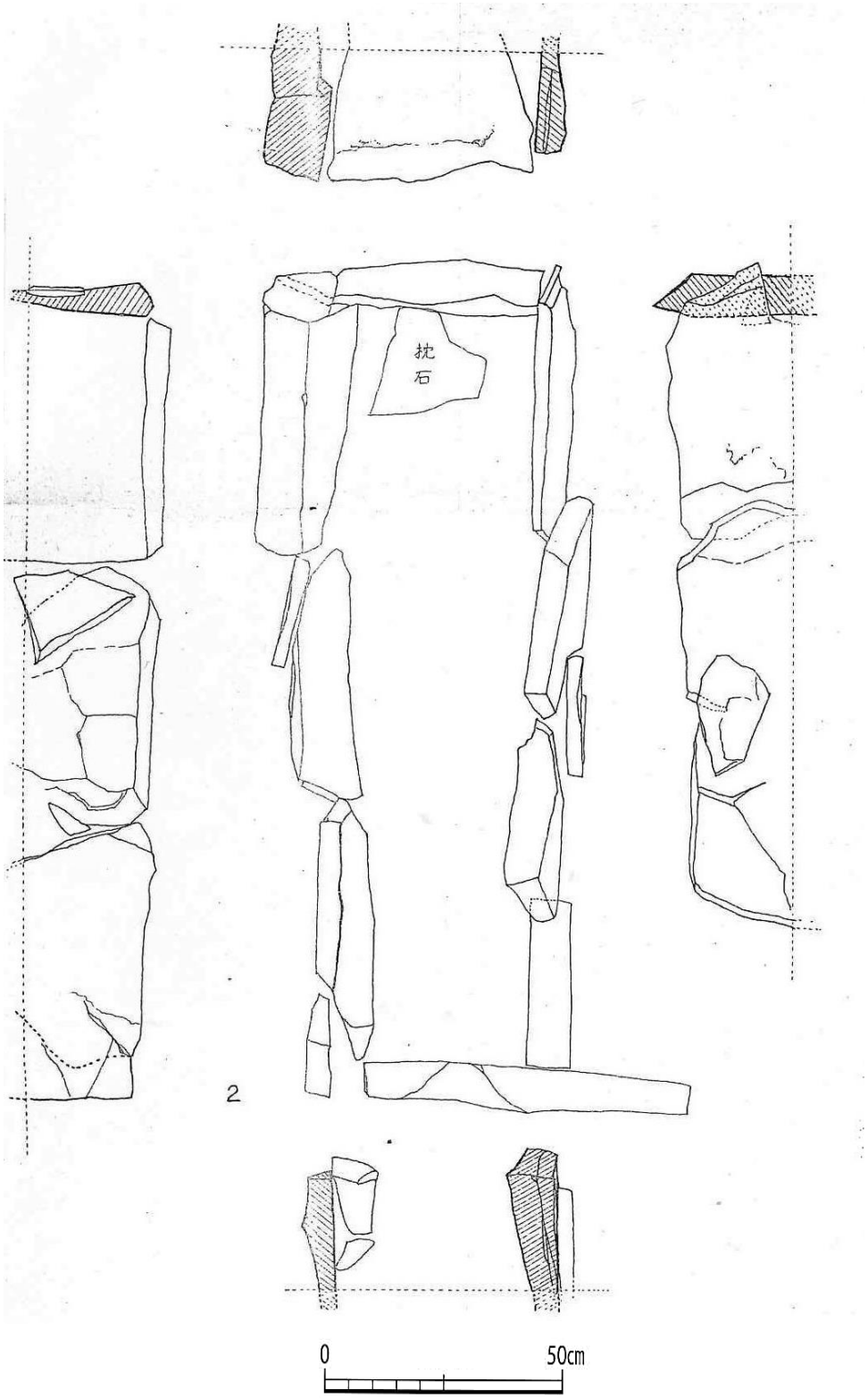
調査区の北東側に位置しており、9,11,12 号棺に囲まれるように出土していることから、小児用とすれば同じ親族関係にあたる可能性も考えられる。主軸はほぼ南北方向で、安山岩の板状自然石 5 個を用い、縦 100 cm・横幅が広い方で 70 cm・狭い方で 60 cm・深さ 35 cmである。床面に大小 20 個の平石を敷く。長さの割に幅の広い特異性をもつ。副葬品などの出土物はなかった



第 13 図　　10 号石棺墓実測図

⑨ 11 号石棺墓

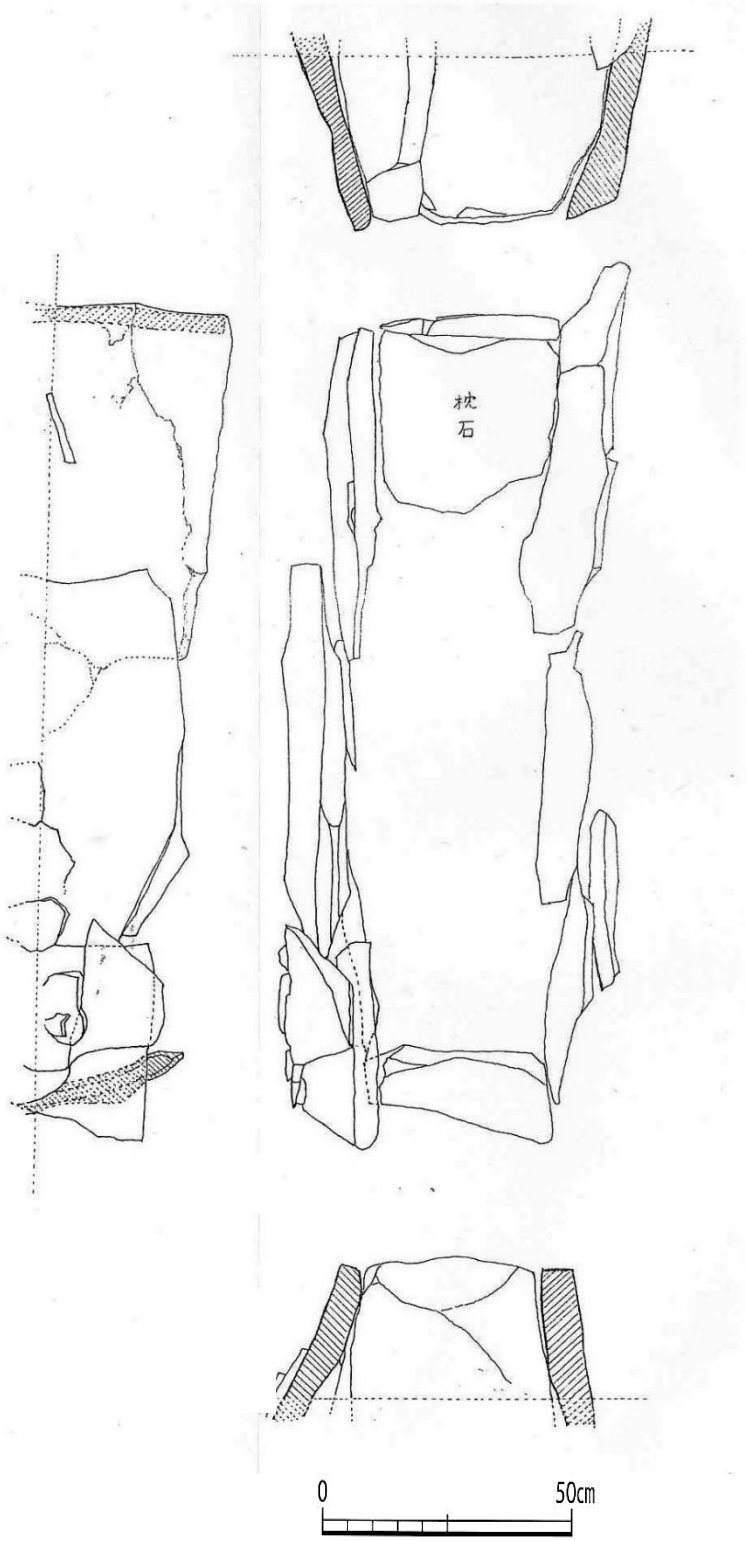
調査区の北東端で検出され、9 号墓と並んでいる。安山岩の板状自然石 12 個をもって縦 165 ㎝・横 40 ㎝・深さ 25 ㎝につくり、片方の床上に同質の平石をおいて枕としているものと考えられる。主軸は、北西から南東にかけてであり、枕石としたものが頭位とすれば北向きということになる。副葬品などは認められなかった。



第 14 図　　11 号石棺墓実測図

⑩ 12号石棺墓

調査区の中央東端で検出された石棺で、主軸は北東―南西である。安山岩の板状自然石9個を縦160㎝・横40㎝・深さ30㎝ほどの大きさに組み、片方の側石に接して同質の平石を置いてある。これも枕石に相当するものであろう。人骨や副葬品などの出土はなかった。

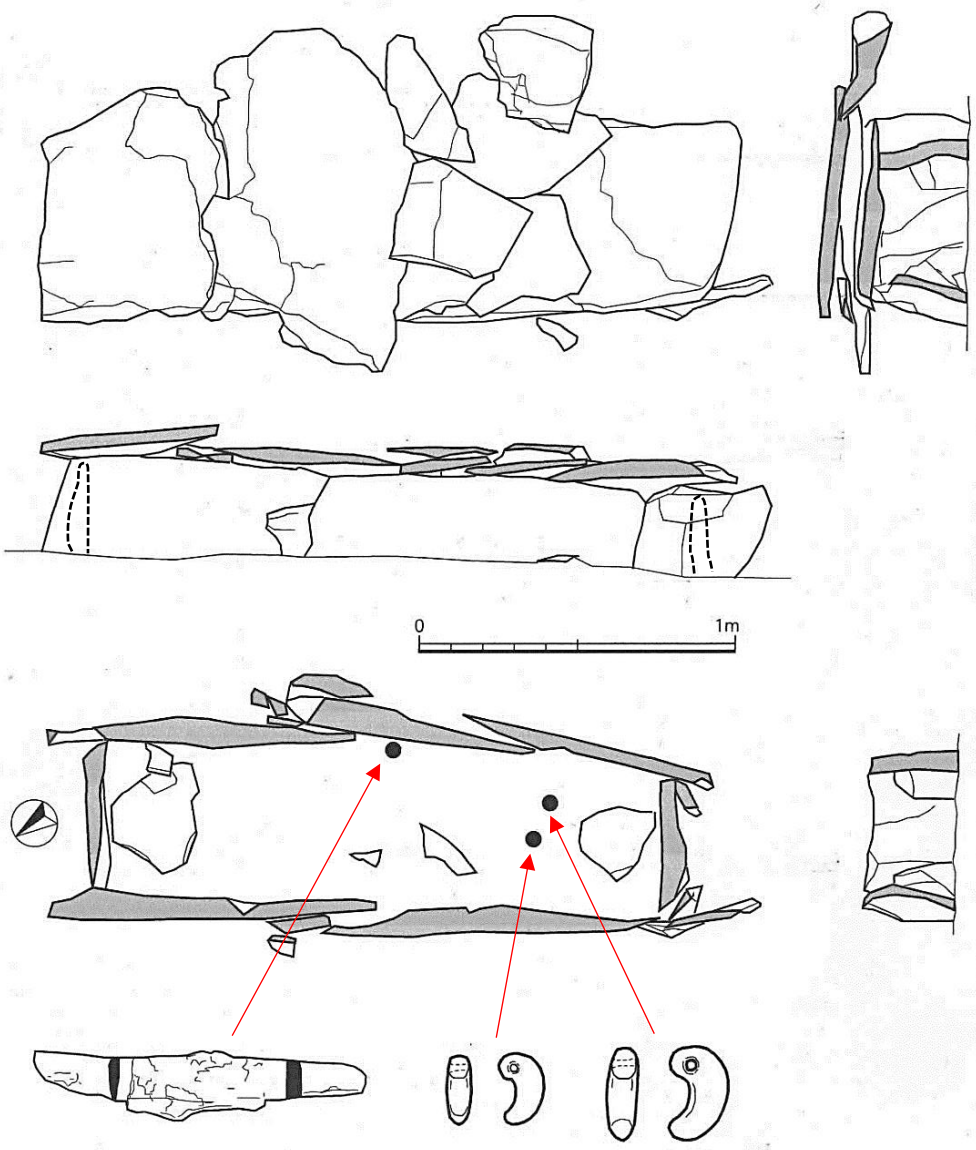


第15図　12号石棺墓実測図

⑪ 13 号石棺墓

安山岩の板状自然石 10 数個をもって縦 175 cm・横が広い方で 50 cm・狭い方で 43 cm・深さ 30 cm ほどの大きさに組んで棺郭をつくる。中央部がわずかに広くなっている。床面の両端にそれぞれ同質の平石 1 個ずつがおかれる。内部には一面　濃厚に赤色顔料が敷かれ、それに混じて刀子一振とメノウ製の勾玉 2 点の副葬品が出土した。一つの石棺内で床上両端に平石を据えた状態は、平石は枕として備えたもので、両端にあることは互い違いに 2 体を埋葬した可能性がある。このような例は玉名市滑石字小路出土の箱式石棺とまったく共通する。他の形式の石棺や封土式古墳等においても、そうした例は少くない。

この石棺は、昭和 43 年 3 月、国道をはさんだ南側の、段下りの畑地に位置して、圃場整備工事中、地表下 40 cmのところから出土したものではあるが、群中の一つとして分布の範囲を示す南限的な存在としても重視すべきものである。



第 16 図　　13 号石棺墓及び出土遺物実測図

６　大原箱式石棺群第７号石棺人骨について

内藤芳篤（長崎大学医学部）

熊本県玉名市岱明町野口字大原の箱式石棺群は、1967 年から 68 年にかけて田添夏喜氏等によって調査され、第 7 号石棺より古墳時代人骨 1 体が出土した。人骨の保存状態は良好ではないが、残存していた人骨について人類学的観察及び一部計測を行ったので、その結果を報告する。

① 資料

人骨は完全なものはなく、各骨の一部であるが、その種類をあげると次のとおりである。

頭蓋骨

脳頭蓋：前頭骨、両側頭頂骨、両側側頭骨、後頭骨

顔面頭蓋：両側頬骨、両側上顎骨、下顎骨

歯：釘植歯（1 本)、遊離歯（13 本）

四肢骨

上肢骨：両側鎮骨、右側上腕骨、右側尺骨

下肢骨：右側大腿骨、両側脛骨

② 初見

１．頭蓋骨

(1) 脳頭蓋

前頭骨の前部に少量の朱が付着しているのが見られる。眉上弓は隆起し、乳様突起の発達は良好で、矢状縫合は外板では離開している。

頭蓋を復元し、諸径を計測することは不可能であるが、残存部から推測すると、頭型はやや長頭に傾いているようである。

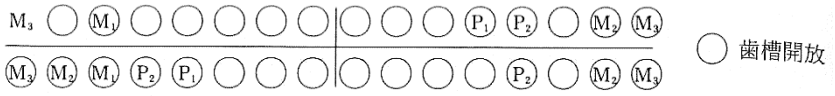
(2) 顔面頭蓋

顔面全体の形状は不明であるが、横径が多少小さいものと推測される。上顎歯槽幅は 59 ㎜、口蓋幅は 36 ㎜でいずれも比較的小さい（表 1)。

下顎骨の大きさは中等度であるが、観察したところでは、幅径が下顎長に比してやや小さいようである。オトガイ高は 32 ㎜、下顎体高は 33 ㎜である。歯槽部の骨吸収は見られず、また歯槽性突顎の傾向も認められない（表 2)。

(3) 歯

歯は右側上顎第 3 大臼歯 M3 のみが釘植しているが、他は死後遊離している。歯式で示すとおりである。



歯の咬耗度は Broca の 2 度である。なお風習的抜歯の痕跡は認められない。

２．四肢骨

(1) 上腕骨

右側上腕骨の骨体大部分が残っている。両骨端を欠くので最大長の計測はできないが、骨は太く、頑

丈で、三角筋粗面もよく発達している。

推定中央位での最大径は 24 ㎜、最小径は 17 ㎜、したがって横断示数は 70.83 となり、骨体の扁平性が認められる。中央周は 70 ㎜で、また骨体最小周は 65 ㎜である。これらの計測値は男性計測値としてもかなり大きな値である（表 3)。

計測値を西日本古墳人（城 1938)、朝田横穴墓古墳人（松下 1982)、旭台地下式横穴古墳人（松下 1983）等の男性骨と比較してみると、大原古墳人は中央最大径では大きく、最小径ではほとんど差がなく、したがって中央断面示数で小さい値を示し、扁平性が強い。また、中央周、最小周はいずれも大きい。すなわち大原古墳人は他の古墳人と比して骨体が太く、扁平性が強いということができる。

（2）大腿骨

右側大腿骨の下半部が残っているが、下骨端の一部は破損している。骨は太く、頑丈で、粗線はよく発達して隆起し、残存部からも柱状形成の像が認められる。

（3）脛骨

両側脛骨の骨体大部分が残っているが、上、下骨端を欠くので、最大長、全長等の計測は不可能である。骨は太く、扁平で、ヒラメ筋線がよく発達しており、左側では後面に一稜が見られる。推定中央位において、中央最大径は右側 31 ㎜、左側 32 ㎜、横径は右側 22 ㎜、左側 21 ㎜で、したがって断面示数は右側 70.97、左側 65.63 となり、扁平性が認められる。また骨体周は右側 85 ㎜、左側 84 ㎜で大きい。ついで栄養孔位における最大径は右側が 37 ㎜、左側が 36 ㎜、横径が右側 24 ㎜、左側 23 ㎜で、したがって同部位の横断示数は右側が 64.86、左側が 63.89 となり、周径は右側 97 ㎜、左側 95 ㎜である（表 4)。

これらの計測値と上記古墳人および南九州古墳人（内藤 1985）の男性と比較すると、大原古墳人は、他の古墳人に比して、中央位および栄養孔位において、最大径では大きく、横径ではほとんど差がなく、したがって横断示数では小さい値を示している。また、周径では大きい値を示している。すなわち大原古墳人は上腕骨の場合と同じように骨体が太く、かつ扁平性が強いということができる。

３．性別および年齢

頭骨における眉上弓の隆起、乳様突起の発達、また四肢骨における諸径や周径の大きさから男性骨と推定される。ついで頭蓋冠外板の離開および歯の咬耗度から高齢者ではなく、壮年期のものと推測される。すなわち本例は男性・壮年骨と考えて差し支えないであろう。

③ 要約

熊本県玉名市岱明町野口字大原の箱式石棺群第 7 号石棺から出土した人骨 1 体について観察所見及び一部計測値を述べたが、以上のことがらを要約すると次のとおりである。

（１） 大原古墳人骨は、男性・壮年骨と推測される。

（２） 頭蓋骨ではやや長頭の傾向がうかがわれ、顔面頭蓋では幅径が多少小さいようである。

（３） 四肢骨は太くて頑丈であり、上腕骨および脛骨には扁平性が見られ、大腿骨では柱状形成の像が認められる。

（４） 以上を要するに、本人骨は古墳人としては骨格が大きく、扁平性や柱状形成など古い形質をとどめているものである。

表1　顔面頭蓋計測値(mm)

		大原男性
60.	上顎歯槽長	−
61.	上顎歯槽幅	59
62.	口蓋長	−
63.	口蓋幅	36
64.	口蓋高	−

表2　下顎骨計測値(mm)

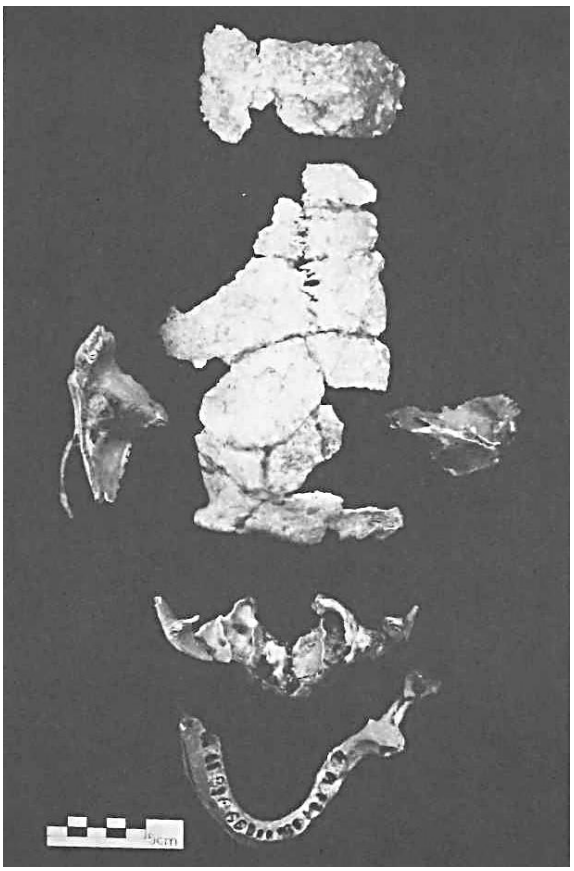
		大原男性
69.	オトガイ高	32
69(1).	下顎体高(右)	33
	(左)	−

表3　上腕骨計測値(mm)

		大原男性右
5.	中央最大径	24
6.	中央最小径	17
7.	骨体最小周	65
7(a).	中　央　周	70
6/5	骨体断面示数	70.83

表4　脛骨計測値(mm)

		大原男性	
		右	左
8.	中央最大径	31	32
8a.	栄養孔位最大径	37	36
9.	中央横径	22	21
9a.	栄養孔位横径	24	23
10.	骨 体 周	85	84
10a.	栄養孔位周	97	95
10b.	最 小 周	−	76
9/8	中央断面示数	70.97	65.63
9a/8a	栄養孔位断面示数	64.86	63.89



大原人骨：(1) 頭蓋骨

大原人骨：(2) 四肢骨

7【追加報告】石棺墓周辺の調査

これから掲げる調査資料は、田添夏喜氏による報告書があるわけではないが、同じく大原遺跡に関する遺物であるため、ここで追加して報告することにした。よって、本文は田添氏の執筆によるものではない。旧岱明町で指定文化財となっていた資料などもあったため、当時の指定台帳などを参考にした。その他の文献で公表されている資料も含め、ここに集約したものである。

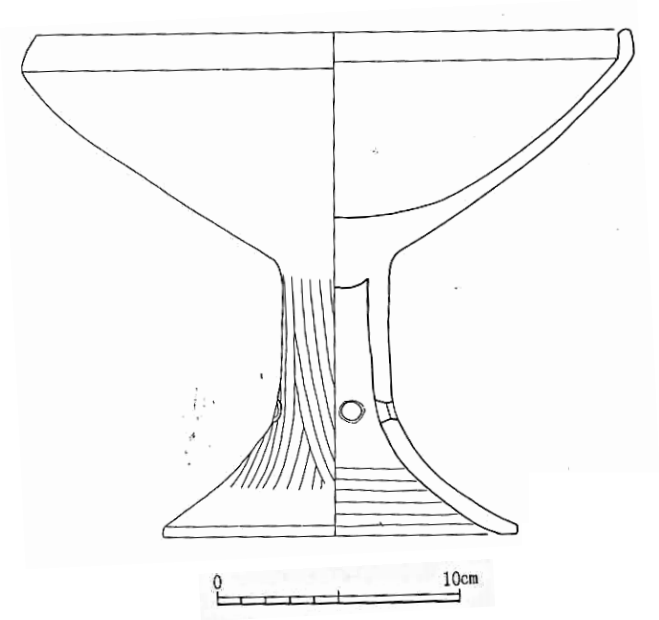
① 住居跡群

前項で述べたように、調査区の西端から水路際にかけては弥生時代後期から終末期にかけての土器が集中して検出されている。緊急性もあって、石棺墓の調査、取り上げが優先されていたため、これらの土器集中部については図面記録が現段階では確認できない。写真はわずかに残されていたが、おそらく住居跡が切りあっていたものと考えられる。田添氏の報告分でも「住居跡群」と表記され、「竪穴を設けるわけではなく、柱穴は多数確認されたにも拘わらず、すべて配列状態が不規則のため、確実に住居の輪郭を把握することは不可能であった」と記録されている。床面から検出したとされる弥生土器には完形品を含むものがあり、これらの遺物の分布状態から、少なくとも 4 基の住居跡が切りあった状態であったと判断され、水路際の崖面にも多数の住居跡があった可能性を指摘している。この水路はいわゆる友田川であり、上流側の溜池から引かれた人口の水路であり、大原遺跡の集落域を断ち切られたとみられ、水路の断面に住居跡群が引っかかっていたものと推測される。この水路は現在コンクリート化されており、その痕跡はみることができない。

土器は、完形の高坏、小型壺や波状文や流水文を施すもの、円形貼付文があるものなど、岱明玉名線に伴う発掘調査で出土している土器群と一致するため、弥生時代後期から古墳時代前期に至るまでの住居跡が切りあっていたものと考えられる。ここでは、実測図が残っていたものを中心に代表される遺物を紹介する。ただし、出土状況が明確でないため、石棺群との関係、また石棺群の時期特定までは至らないが、少なくとも時代の参考になる。

【大原箱式石棺群付近で検出された住居跡群】

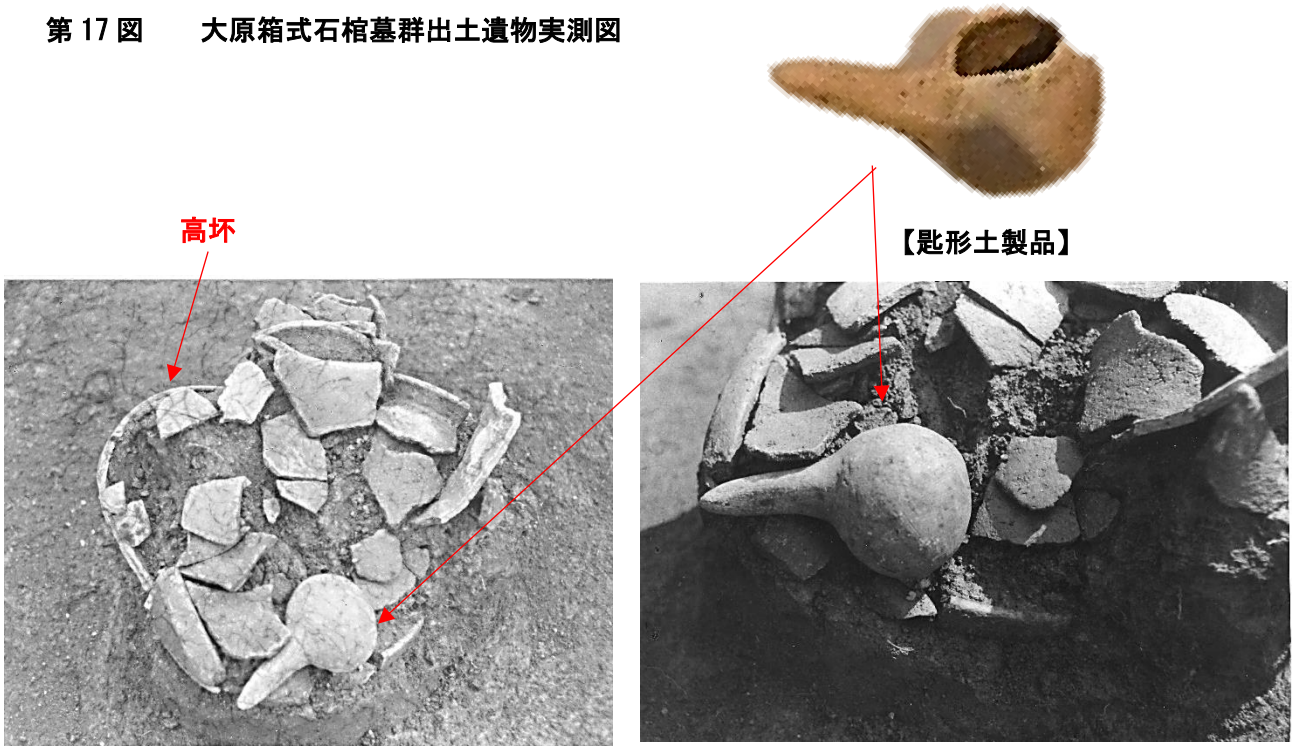
下図は、完形の高坏で、住居の床面付近で出土している。口径 24.6 cmで口縁端部は立ち上がり、やや内傾する。坏底部径は 14.5 cmである。検出時は、坏部の上に匙形土製品や小型土器の破片が山盛状になって出土したとある【下写真】。時期は、口縁部の特徴から大原Ⅲ期に相当するとみられ、弥生時代後期中葉と考えられるが、類例は同遺跡には認められない。大分県の安国寺遺跡資料に類型がある。当資料は旧町指定文化財で、現在は岱明町公民館に展示されている。



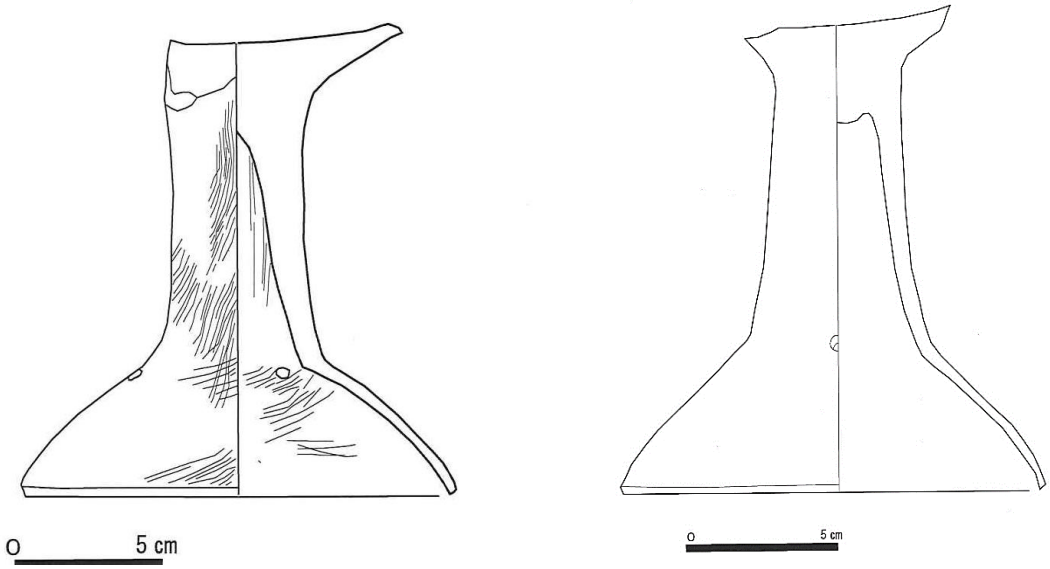
（図は河北 1983『肥後考古』第４号より引用）

第 17 図　　大原箱式石棺墓群出土遺物実測図

【高坏出土状況】



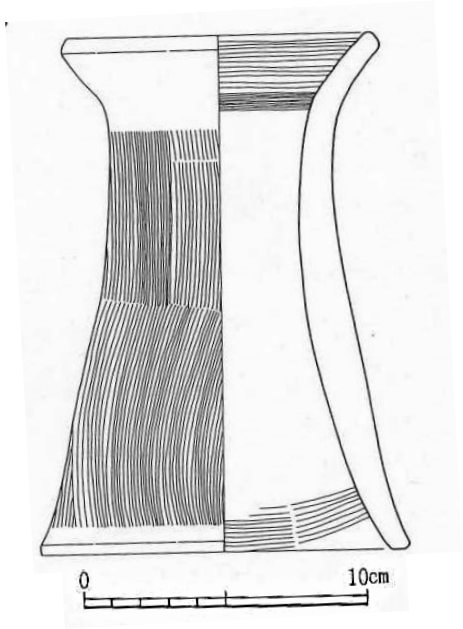
【高坏上部の遺物出土状況】



第 18 図　大原箱式石棺群出土の高坏（田添氏実測図をトレース）

第 18 図の 2 点は、高坏である。田添氏の実測図を再トレースした。坏部はいずれも欠損しているため全体の形状は不明である。裾部はやや丸みを帯びながら膨らみ、穿孔がある。口縁部分がないが 2 点ともほぼ同形で、大原編年におけるⅤ～Ⅵ期に相当し、弥生時代終末から古墳時代初頭とみられる。前述の高坏とこれらの時期幅をみれば、住居跡群は少なくとも後期中葉から古墳初頭まで切り合いがあった可能性がある。

大原遺跡における高坏の変遷をみると、弥生時代中期は口縁部断面が甕と同様に鋤先状であり、裾部も丸みを帯びず膨らまない。弥生時代後期になると、口縁部内面の突起がなくなり、L 字形になっていく。後期後葉になると、口縁部から坏部が有段状になっていき、外反していく。弥生時代週末期になると、坏部上半部（口縁部）が長くなり、方形の透かし孔が付く、有明海沿岸地域の特徴的な高坏がみられるようになる。なお、これらの高坏も現在は岱明町公民館に展示されている。

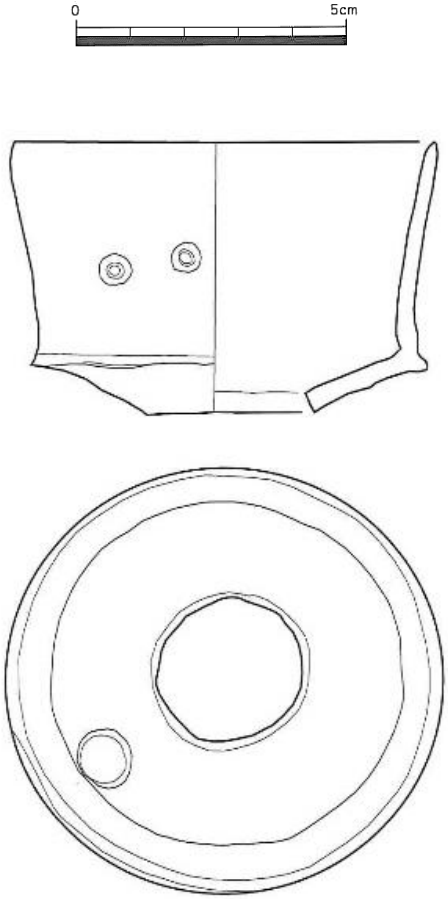


第 19 図は、先の高坏と同時に出土したと考えられる器台である。以前、河北毅氏によって『肥後考古』第 4 号にて「菊池川下流域の弥生土器」として報告された資料である。口縁部に対して裾部の方がやや開く形状で、外面には縦方向の刷毛目が明瞭に残る。形状から、弥生時代後期後葉から終末期に近いものとみられる。大原編年では、Ⅳ期～Ⅴ期に相当する。

器台は、弥生時代中期は上下ともあまり開かず均等であるのに対し、後期になるにつれ下半部が開き、上部が窄まる傾向にあるようである。

（図は河北 1983『肥後考古』第４号より引用）

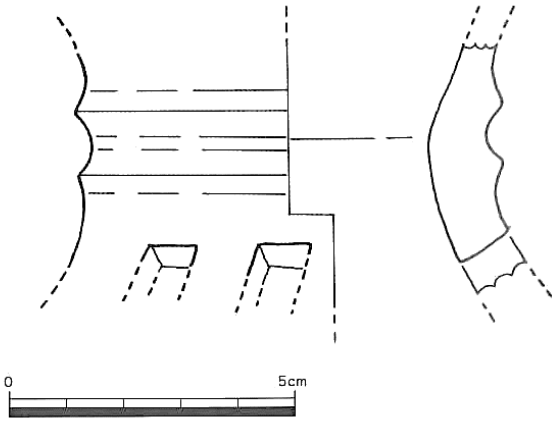
第 19 図　大原箱式石棺群出土の器台



第 20 図　大原箱式石棺群出土の土器
（田添氏実測図をトレース）

第 20 図は、同じ住居跡群から出土した弥生土器で、形状が特殊で上下の向きも明確ではないが、田添氏の実測図をそのまま製図している。写真を掲載しているが上下とも貫通しており、用途も不明である。特殊器台ともいえるが、円形の開口部が二つあり、同部にも円形の刺突文が 2 か所ある。残念ながら現物が所在不明となっており、実見できない。以前、山鹿市の方保田東原遺跡を調査されていた中村幸史郎氏に、図面と写真をみてもらったが、類例は見たことがないということであった。岱明玉名線建設に伴う大原遺跡調査区でも特殊な器台、高坏等が出土しているが、類例はないものの、弥生時代後期後葉から終末期に相当するものと考えられる。

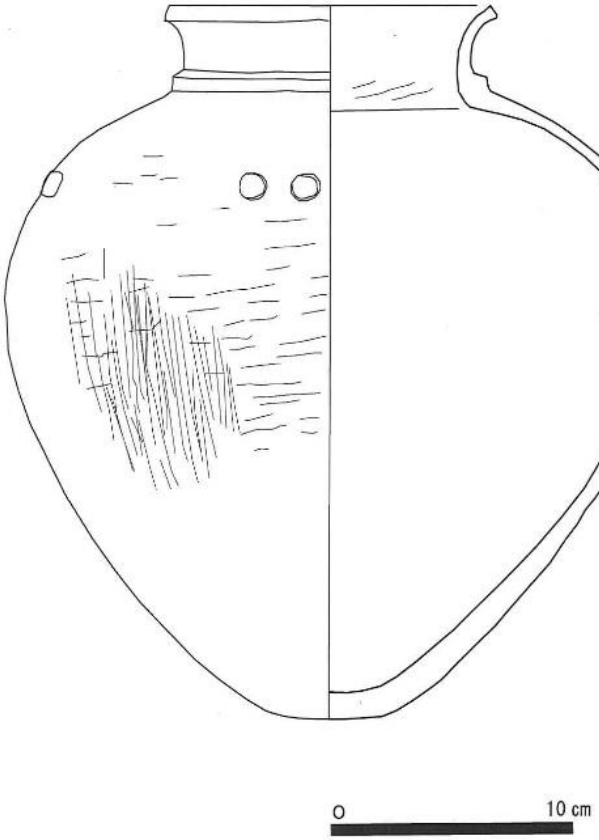
【大原箱式石棺群出土の土器】



第 21 図　大原遺跡出土の肥前型器台

第 21 図は、田添氏による石棺群の調査区で出土した遺物ではない。玉名高等学校考古学部資料の中で、「大原遺跡・昭和 47 年採集」と注記がある資料で、遺跡名は間違いないが、正確な出土地点は不明である。昭和 42 年に石棺群が調査されているので、現在の県道が開通した後に周辺の工事現場から採集された可能性がある。

器種は器台で、上下が欠損しているが、方形の透かし孔が 2 か所確認できる。いわゆる肥前型器台とされるもので、弥生時代後期から終末期にかけて、佐賀県西部や長崎県を中心とした有明海沿岸地域に分布する。県内では、うてな遺跡（菊池市）や蒲生・上の原遺跡（山鹿市）、宇土城城山遺跡（宇土市）などで出土例があり、市内では柳町遺跡から破片 2 点が出土しているにすぎない。この資料は、くびれ部に断面三角形の突帯が 2 条めぐる点など蒲生・上の原遺跡資料と類似するが、こちらは小ぶりである。



第 22 図　大原箱式石棺群出土の壺

（田添氏実測図をトレース）

22 図は、田添氏調査の石棺群付近から出土した弥生土器の壺である。田添氏の実測図から再トレースした。ほぼ完形であるが、出土状況の写真をみると断面に遺構のようなプランが見える。床が平面でないことから、この遺物は土坑か溝状の遺構から出土した可能性がある。

口縁部は外反し、頸部に突帯がめぐる。肩が張り、底部にかけて細くなる。底部は微妙に丸みを帯びる。肩部に円形貼付文が 2 つセットで 4 か所に施されている。

このような形状の壺は大原編年ではⅢ期の弥生時代後期中葉から存在する。しかし、円形貼付文は弥生時代終末期から多くみられるようになり、古墳時代前期前半まで壺に施文されるようである。この壺は現在、岱明町公民館に展示されている。

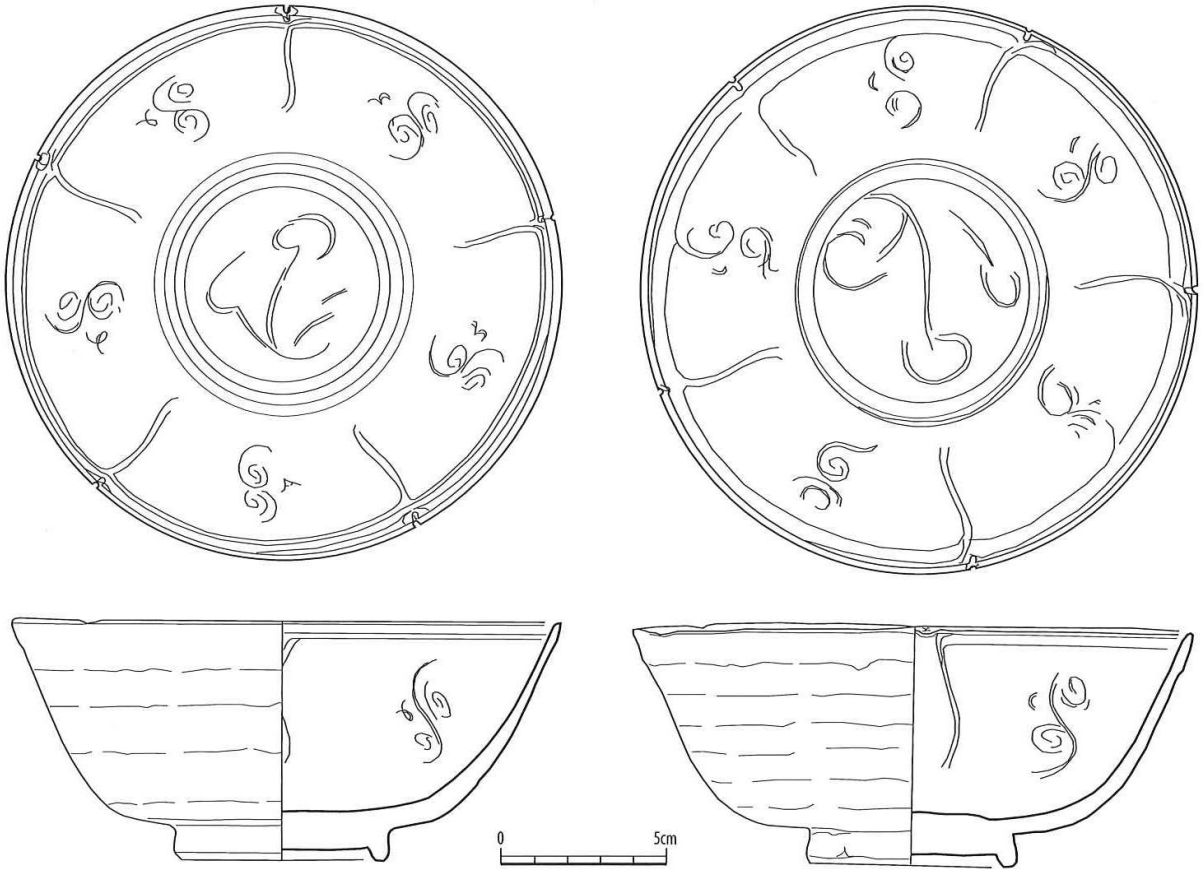
【大原箱式石棺群の壺出土状況】

【大原箱式石棺群出土の壺】

② 中世土壙墓

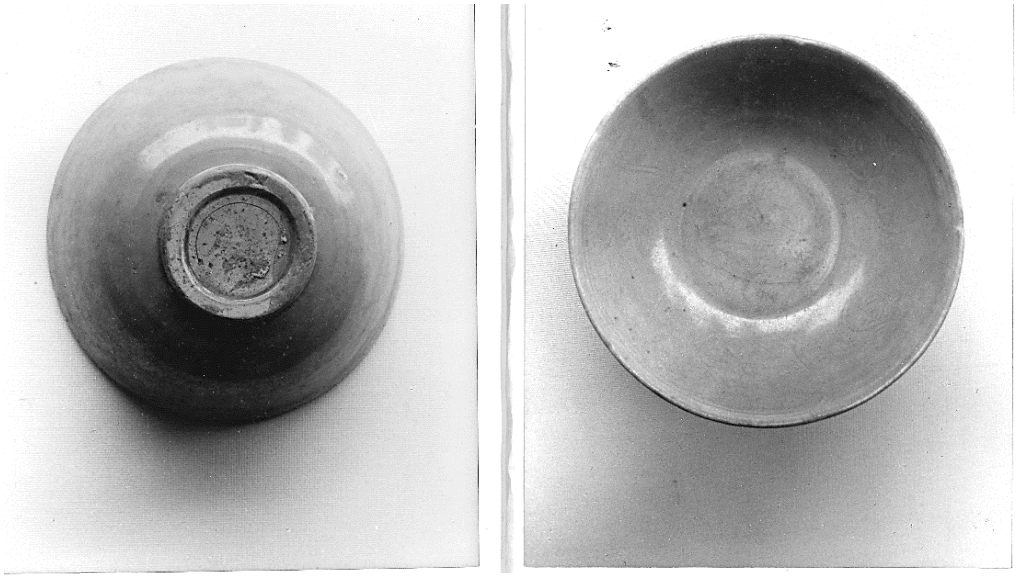
前項で述べたように、昭和 34 年 8 月 25 日、調査区南側（石棺墓群より東南方へ 80m先）の住宅工事に際して、トイレ部分掘開中に地表下約 70 cmの深さにおいて土師器皿 7 点と共に完形の青磁碗 2 点が出土している。出土地点は、玉名市岱明町野口 551-3 である（第 3 図参照）。調査では、遺構プランの検出まで行われていないため、明確でないが遺物の出土状況から土壙墓であった可能性が高い。

青磁碗はいずれも同形で、口縁の直径 17 cm、高さ 7.3 cmで高台が付く。口縁は 5 等分して小さく刻みを入れた 5 弁形である。内面に片切彫りの手法をもって器底の円周方向へ、浅い湾曲の 2 平行線を画し、画内に 2 段に重ねた右巻雲文を配する文様を施す。中国龍泉窯系（12 世紀後半）の青磁花弁文碗であり、博多遺跡群に出土例がある。市内では他に山田の高岡原遺跡における中世土壙墓において、青磁碗 2 点が完形で出土しているほか、浄光寺蓮華院跡の土壙墓から白磁碗の完形が滑石製鍋や瓦器碗とセットで出土している。また、その周辺の蓮華遺跡（土壙墓）でも青磁碗の完形品が出土しているが、この大原遺跡土壙墓の出土資料とほぼ同形・同文様であり、これらは同時期に輸入され副葬された貿易陶磁器ということができる。当資料は、旧岱明町指定文化財で現在は登録有形文化財となっている。大原遺跡は弥生時代中期から古墳時代前期を中心とした集落跡であるが、これまで 12 世紀後半以降の糸切底の土師皿や滑石鍋片、13 世紀末～14 世紀初頭の黒色土器を伴った土壙墓は確認されているため、今後注意が必要である。



第 23 図　大原遺跡（土壙墓）出土の青磁碗 2 点

（田添氏実測図をトレース）



【大原遺跡（土壙墓）出土の青磁碗①】

【大原遺跡（土壙墓）出土の青磁碗②】

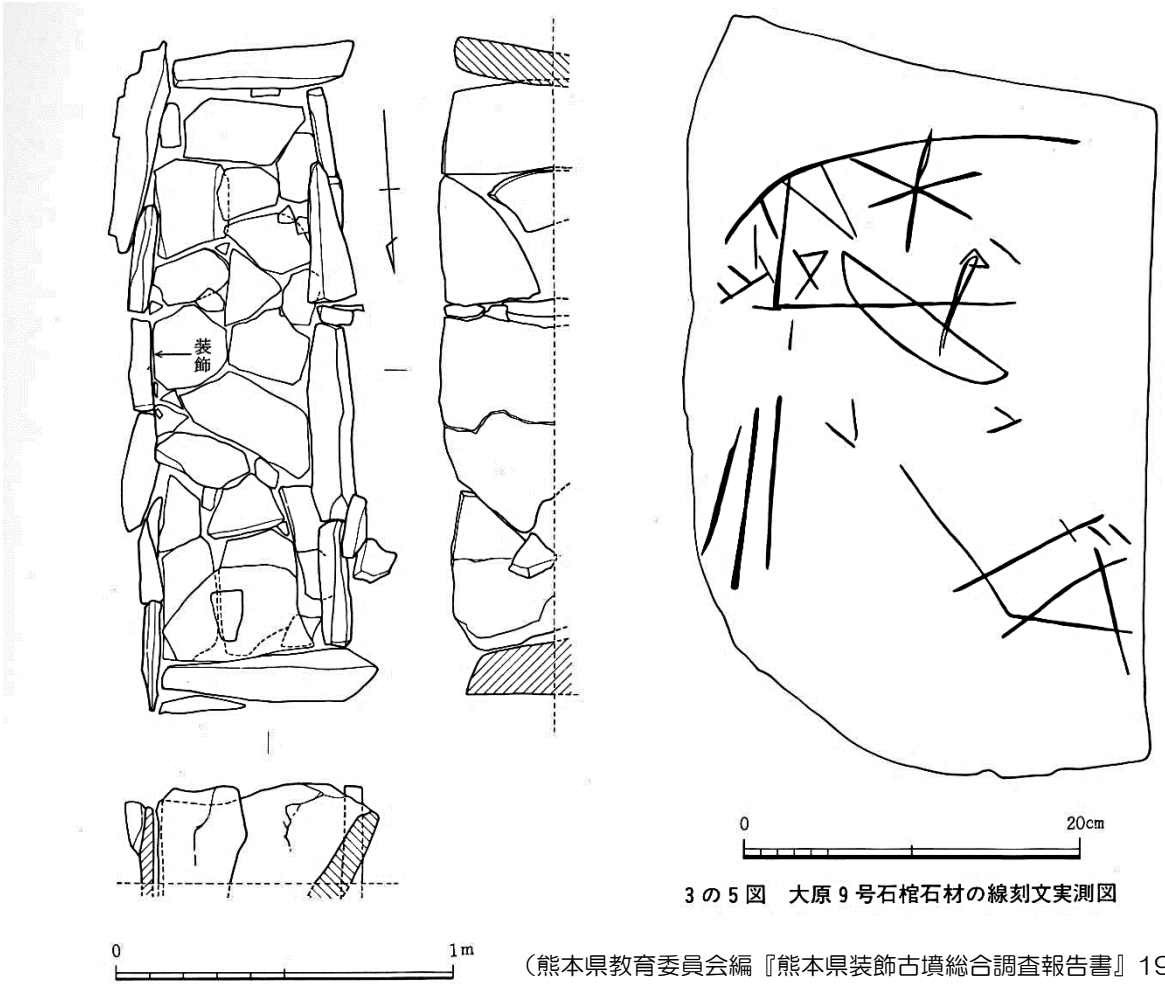
【大原遺跡（土壙墓）出土の青磁碗 2 点】田添氏撮影

③ 石棺墓の線刻画

これまで報告してきたように、大原箱式石棺群の第 9 号墓には側石一部に線刻画が確認されている。近年、吉野ケ里遺跡の新たな調査区においても箱式石棺墓が出土し、その蓋石裏面に多くの線刻画が認められ注目されている。先に追加報告した付近出土の土器群から、箱式石棺群も弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置づけられ、吉野ケ里遺跡とほぼ同時期の線刻として考えることができる。ここで、改めて、この線刻を見直し考察を行いたい。

第 23 図は、昭和 59 年に熊本県教育委員会が編集し刊行した『熊本県装飾古墳総合調査報告書』に掲載された「大原 9 号石棺」の図である。前項で報告している田添氏の原図（第 12 図参照）を再製図してあり、線刻画も模式化され分かりやすくなっている。

ここでの本文を抜粋すると「石面下半部の右端に見られるのは住居の屋根であろう。左側は冬木立であろうか。上半部では中央にあたって小舟に乗り、笠をかぶって棹さす人物が伺われ、その上の直線 3 本を中点に正交させた図文は、夜空に輝く星であろうか。夜空の一つ星は取りも直さず北極星で、古代人はこの星を目当てに夜の航路をきめたという。遺体は舟に乗せて大洋の彼方の死後の浄土へ送るという水葬思想のあらわれであろうか。舟と星（または太陽）の図文は、近くでは玉名市石貫古城横穴群第 1 号の左内壁にある」（田添夏喜）。



（熊本県教育委員会編『熊本県装飾古墳総合調査報告書』1984 より）

第 24 図　大原箱式石棺 9 号墓と線刻実測図

以上の本文は、調査を担当した田添夏喜氏の解釈として掲載されているが、この石材は側石の一部であり、石材の向きによっては違った解釈もできる可能性がある。この石材は縦方向に長く、半分は埋めて側石として立てられているため、石棺構築後は下半分の絵は地下に埋もれていたということになる。つまり、石棺墓として構築する以前に一枚の板石に描かれたもので、これについては、装飾古墳を研究してこられた高木正文氏も指摘している（高木 1999）。また、石材が転用されていた可能性もあり、他に何らかの理由で線刻されていた石材が、9 号墓の側石として転用されたことも考えなくてはならない。

大原箱式石棺群では 13 基もの石棺が検出されているが、蓋石まで完全に残っていたものはあまりなかったようである。現在、残されている調査時の記録資料（実測図・写真）で、蓋石が確認できるのは、7 号と 13 号墓だけである。これらは蓋石と共に内部から人骨や勾玉・刀子などが出土しているため、盗掘を逃れていた可能性が高い。そうだとすれば、他の 11 基は調査時点で蓋がなかったのは盗掘など後世の攪乱を受けていたということができる。副葬品が少ないのはそういった理由が考えられる。

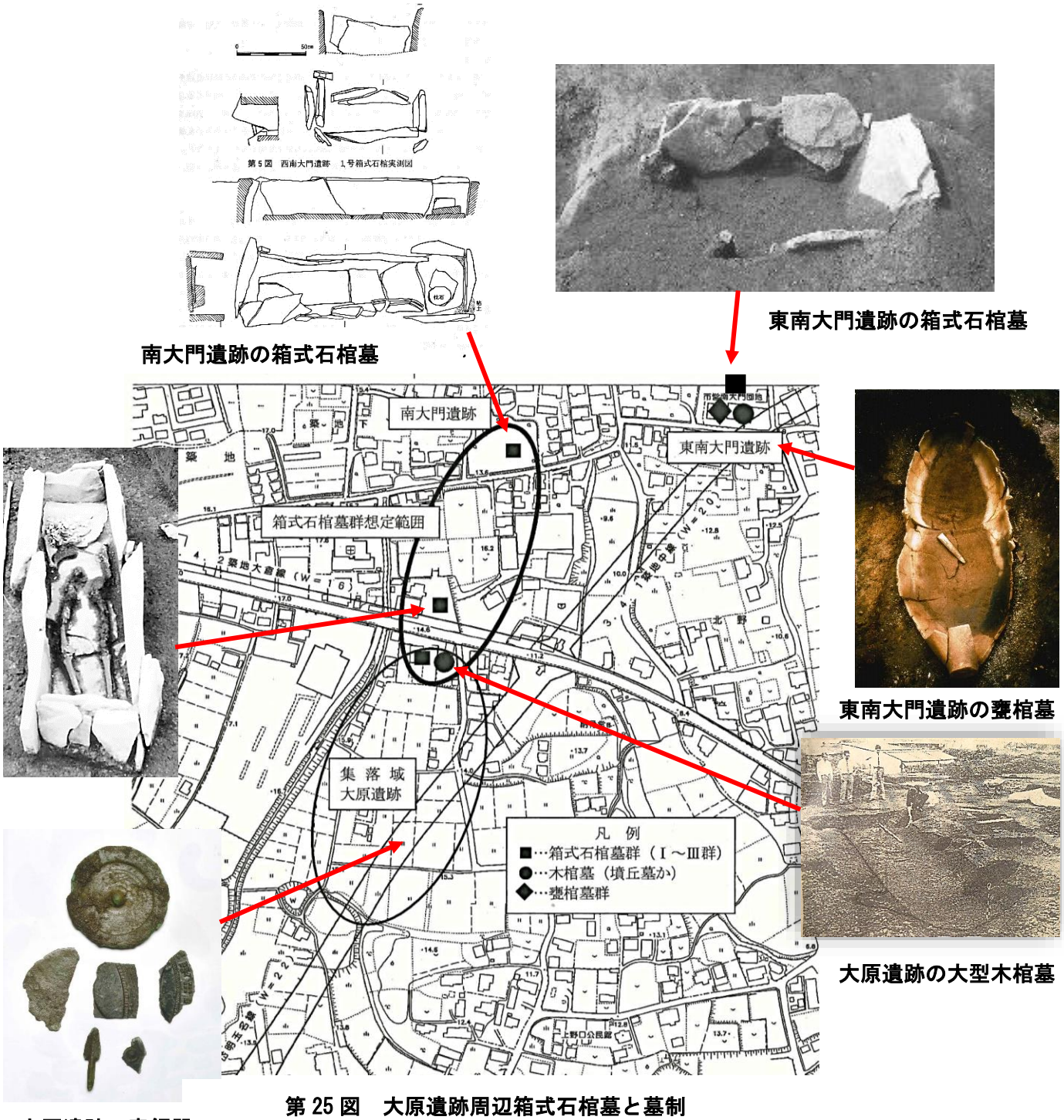
また、失われていた蓋石の裏側には線刻が描かれた石材があった可能性もある。線刻の意味する解釈はともかく、高木正文氏は弥生時代終末期から古墳時代前期に位置付けられる石棺線刻について、装飾古墳の原点という扱いながら、菊池川流域における装飾古墳にその系譜がつながらないとしている。確かに横穴墓になると舟や人物などの線刻は多く見られるが、もっと後世になってからである。

【大原箱式石棺 9 号墓の線刻画】

④ 大原箱式石棺群と周辺の箱式石棺墓

箱式石棺は、北部九州の弥生時代において甕棺墓と共に海岸部から内陸部に流通していくが、墓制の主流とはならなかった。県内において、弥生時代から古墳時代初頭にかけての集団墓制を地域別にみてみると、白川流域から以北にかけては木棺墓と甕棺墓が主体、宇土半島から以南では土壙墓が主体であるのに対して、三角から天草地方にかけては箱式石棺が主体だったとされている。

市内では甕棺墓が主流である中で、この大原遺跡周辺は箱式石棺墓が集中する地域であり、鉄器や勾玉・ガラス玉などが副葬されることから、南側に広がる大原遺跡集落の有力者が埋葬された墓域であったと考えられる。

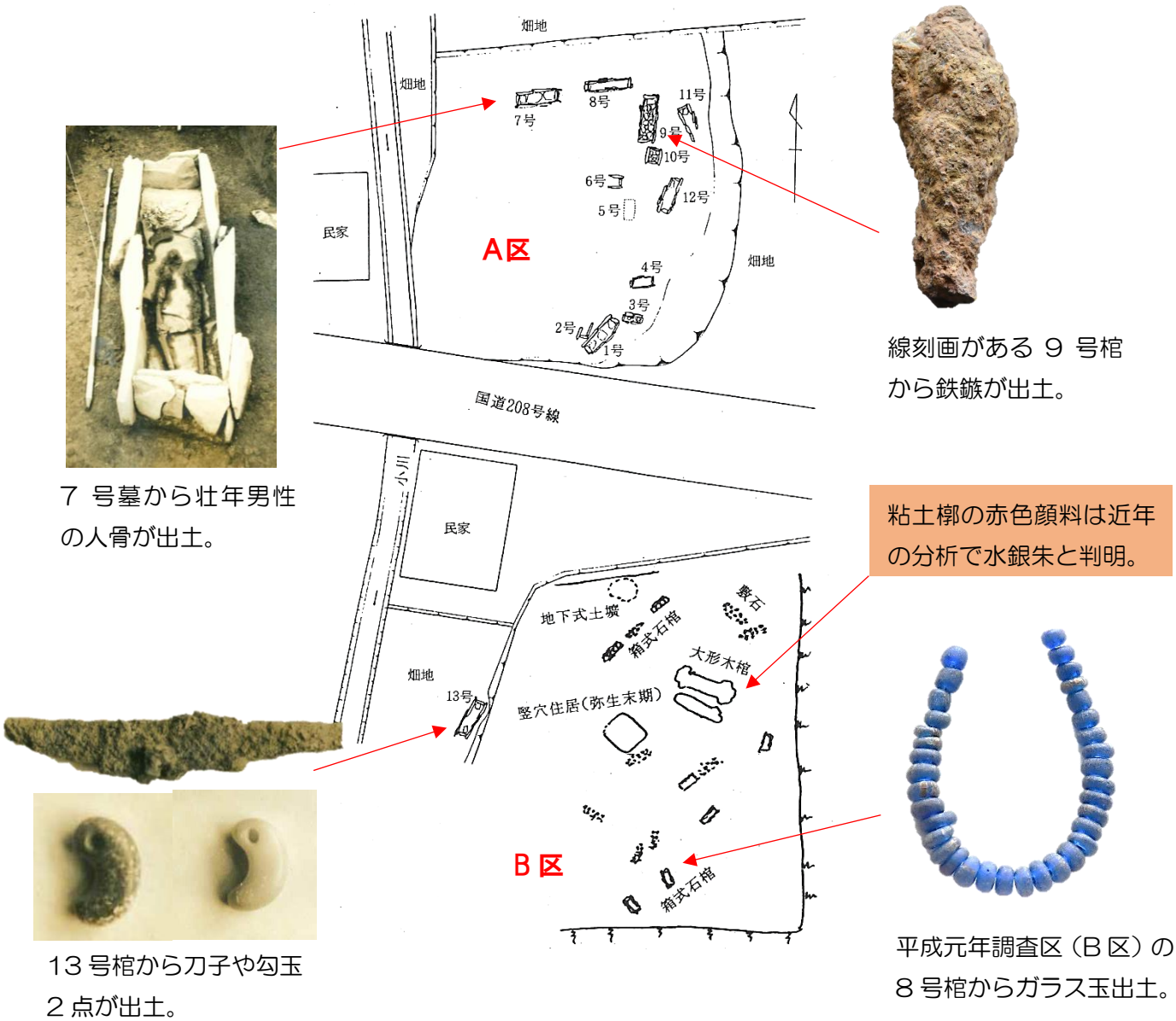


第 25 図　大原遺跡周辺箱式石棺墓と墓制

吉野ケ里遺跡などでは、弥生時代中期後半から箱式石棺墓がみられるが、県内の箱式石棺は古墳時代前期がほとんどと考えられている。近隣では、南関町の大場箱式石棺が弥生時代後期前半であり、破鏡が出土している例がある。市内においては、古墳時代前期になると鏡の副葬がみられるようになる。周溝墓か円墳と考えられる繁根木箱式石棺や前方後円墳である大塚古墳の主体部以外の箱式石棺がその例である。

大原箱式石棺群は、出土した土器などから弥生時代終末期から古墳時代前期頃とみられる。出土した人骨の鑑定でも、古墳人よりは弥生人の特徴を備えているとの見解がされている。市内では甕棺墓が主流である中で、中期に最盛期を迎え、後期の甕棺はほとんどみられないことから、甕棺が衰退し、箱式石棺墓が出現してくるものと考えられる。

大原遺跡の近くに所在する塚原遺跡からは、中期の甕棺墓と共に、石蓋土壙墓が存在している。このころから、石蓋の墓制が出現し、山田中嶋遺跡では、中期から後期初頭の甕棺墓と共に箱式石棺墓が検出されている。このようにして、中期後半から後期初頭頃には市内でも箱式石棺墓が出現し、後期に甕棺墓が終焉すると終末期から古墳時代前期に大原箱式石棺群のように群集してくるものと考えられる



第 26 図　大原箱式石棺群における出土遺物

市内における箱式石棺墓の変遷

弥生時代中期

塚原遺跡で甕棺墓と同時期に
石蓋土壙墓が出現する。

弥生時代後期

中期後半から後期初頭に甕棺墓の周辺
で箱式石棺墓が出現してくる。

山田中嶋遺跡

後期に甕棺墓が終焉すると終末期から
古墳時代前期に箱式石棺が群集する。

大原箱式石棺群

古墳時代前期

滑石小路箱式石棺

繁根木遺跡群

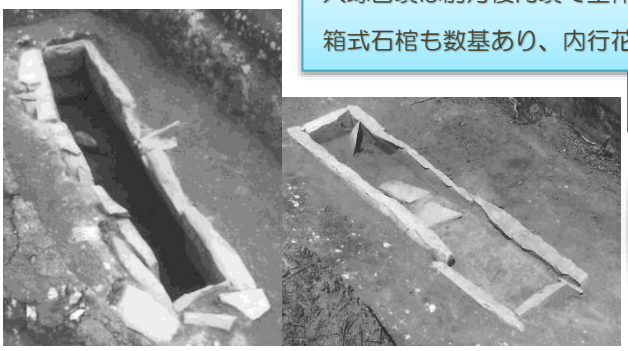
繁根木遺跡群からは、大正時代に棺内から方格規矩鏡が出土しており、現在は熊本博物館に常設展示されている。また近年の調査では、周辺から周溝墓の主体部として箱式石棺が確認されている。

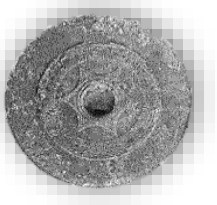
城ヶ辻古墳・１号墳石棺
（玉名高校校庭へ移設）

岡箱式石棺群

大塚古墳は前方後円墳で主体部は舟形石棺だが箱式石棺も数基あり、内行花文鏡も出土。

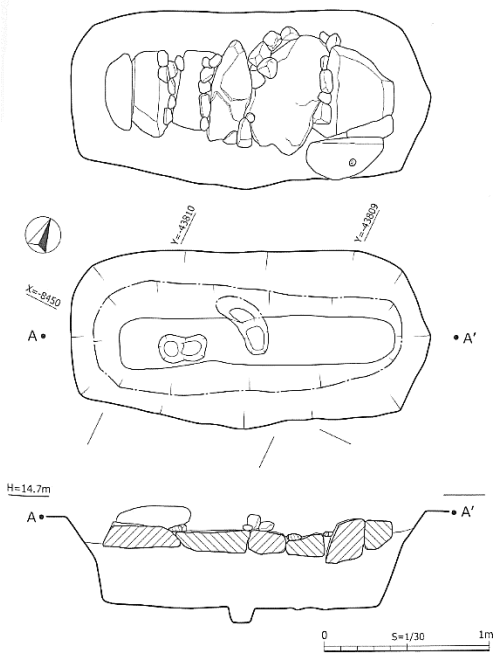
赤禿古墳の箱式石棺



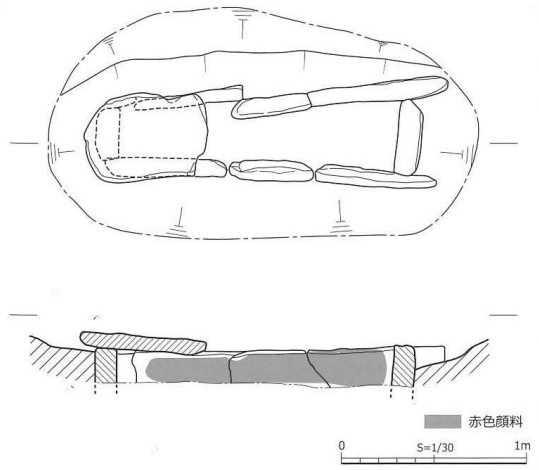


大塚古墳の箱式石棺

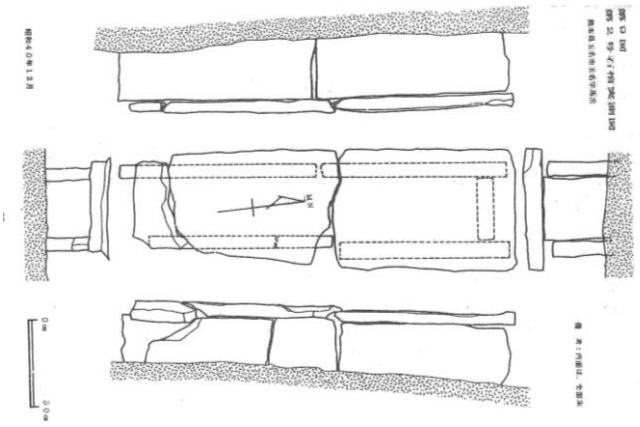
第 27 図　市内における箱式石棺の変遷



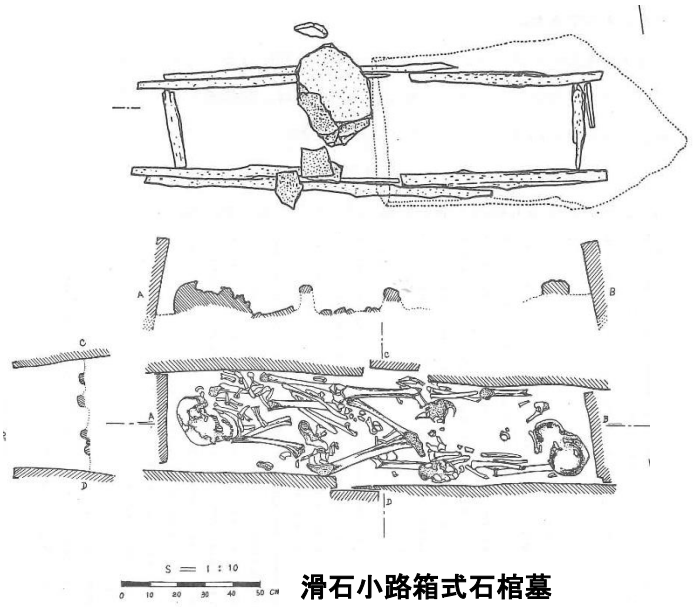
塚原遺跡の石蓋土壙墓



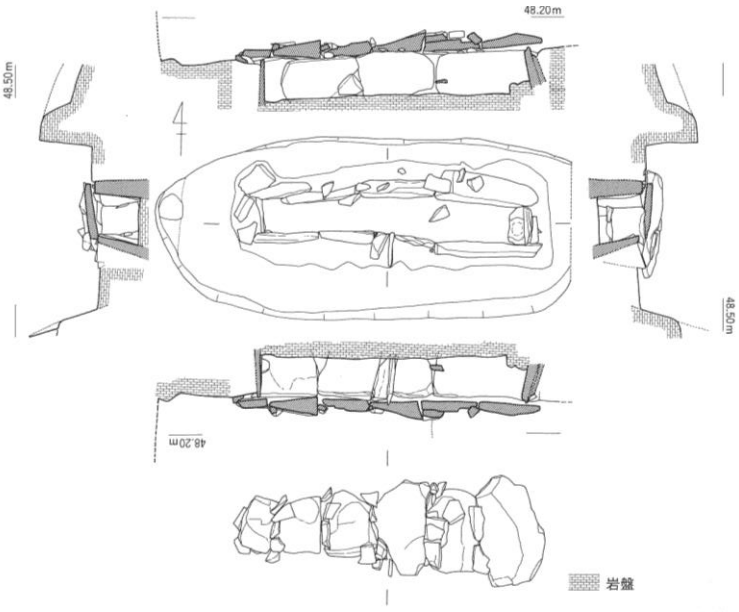
赤禿古墳の箱式石棺墓（凝灰岩製）

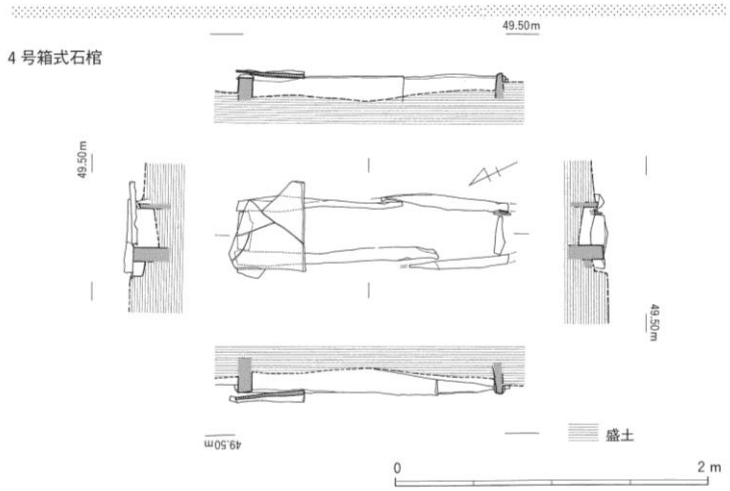


馬出古墳の箱式石棺墓（凝灰岩製）



滑石小路箱式石棺墓





大塚古墳の箱式石棺墓

第 28 図　市内における主要な箱式石棺実測図

大原箱式石棺群は、県道北側の昭和 47 年調査区（A 区）と県道南側の平成元年調査区（B 区）に分かれるが、A 区北側の南大門遺跡（C 区）においても箱式石棺墓が数基確認されている。さらには甕棺墓・木棺墓が主体の東南大門遺跡においても箱式石棺墓が 1 基確認されていることから、丘陵の南北方向にわたって箱式石棺墓が集中して分布していることがわかる。また、副葬品をみると、鉄鏃や刀子、勾玉、ガラス玉などが出土している。平成元年調査区（B 区）においては、報告書が未刊行であり、石棺材も市博物館に保管されているものの未整理のままで、今後の課題となっている。この B 区の箱式石棺にも星などの線刻画が確認されており、一帯が玉名地域においては特殊な集団墓であったことが窺える。

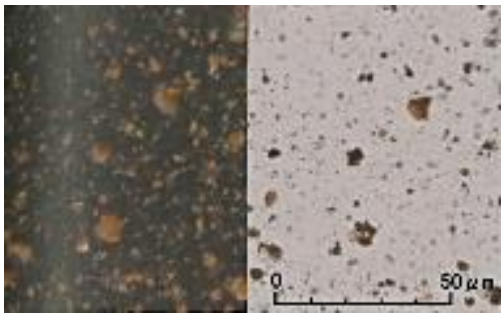
B 区で確認されている大型木棺墓の 1 基は長さが約 6mあり、木棺は残存していなかったが、粘土槨に赤色顔料が付着していた。近年の分析の結果、水銀朱であることが判明している。この木棺墓南側における大原遺跡発掘調査において、小型仿製鏡が出土しているが、この鏡面にも同じく水銀朱が付着していることがわかっている。鏡は住居跡の埋土から検出されたが繊維に包まれていた痕跡があり、本来はこの木棺墓の副葬品であった可能性も否定できない。

以下は、平成 30 年に九州国立博物館の志賀智史氏によって実施された、大原遺跡関連の赤色顔料の分析結果である（「玉名市から出土した赤色顔料について」志賀 2020）。

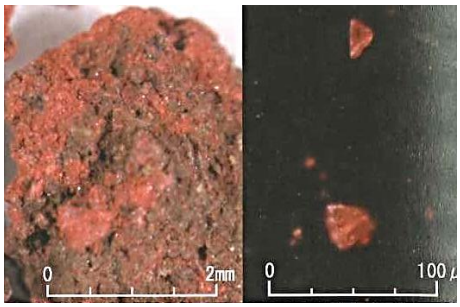
このうち、大原 13 号石棺内の顔料はベンガラで、石棺内面に塗布・散布されたものとされる。さらに阿蘇産褐鉄鉱が原料と推定される特徴的な元素を含まないベンガラ（不定形）が採用されている。

大原南遺跡（B 区）からは 2 基の木棺墓が確認され、うち 2 号木棺墓から検出された顔料は水銀朱で、土壌中に一定量が凝集しており、遺骸に散布された可能性があるという。

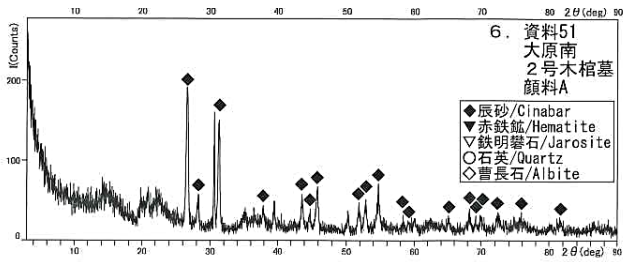
大原 13 号石棺内のベンガラ



大原 13 号石棺内のベンガラ粒子



大原 2 号木棺墓の朱と粒子



大原 2 号木棺墓朱の X 線回析図

（「玉名市から出土した赤色顔料について」志賀 2020 より一部抜粋）。

県内の箱式石棺墓は、阿蘇地域を北限とし、西は本渡市の尾串石棺群、南は水俣市の北園石棺群が南限とされ、下図の範囲に分布している。なお、下の分布図は、いわゆる古墳などの墳丘をもたないものに限定したものである。

この分布から、菊池川流域、白川下流域、緑川流域など県北から県央地区に集中していることがわかる。なかでも菊池川流域は墳丘をもたない石棺が多い地域とされている。箱式石棺は、方形周溝墓などの主体部として存在するものもあり、古墳時代の石棺との分類が必要であるが、弥生時代の箱式石棺墓については以下の特徴が挙げられている。

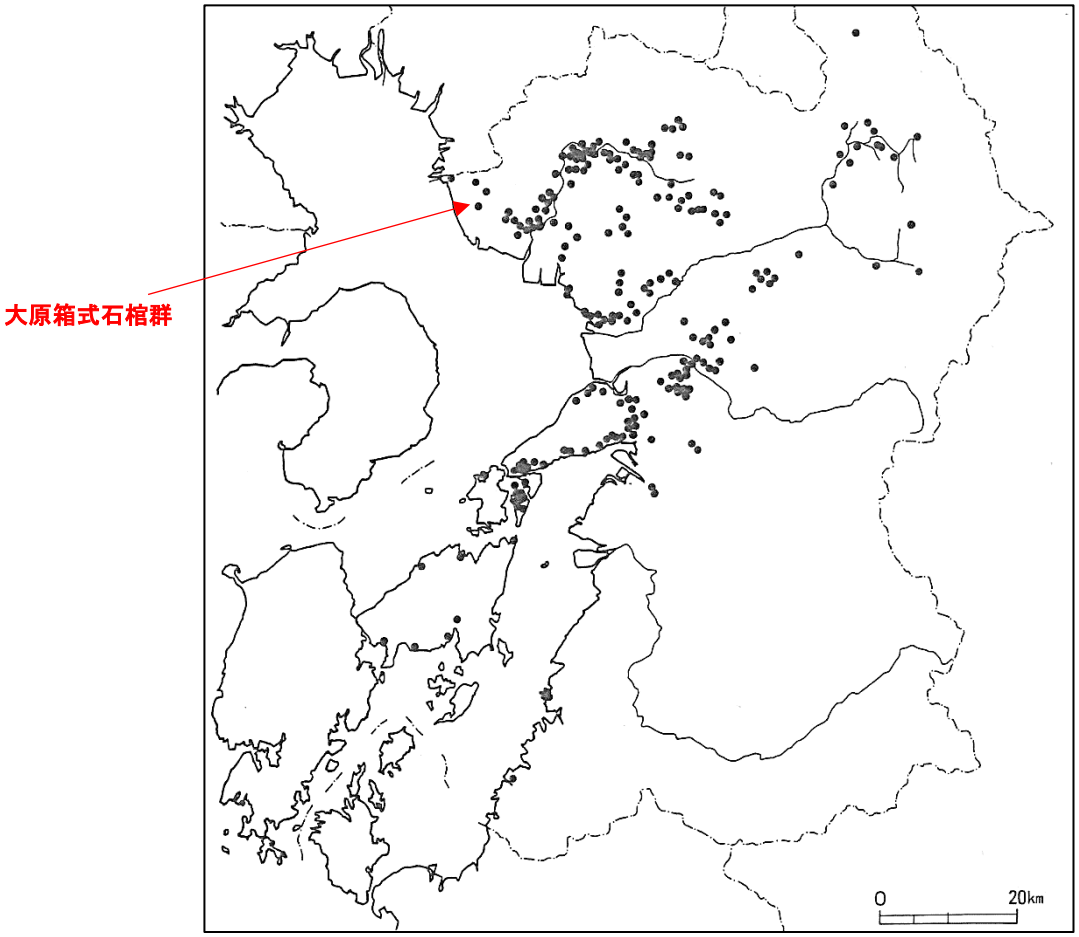
① 顕著な封土をもたない。墳丘が認められないものが多い。

② 石棺墓が群集している。単一の石棺墓は少なく、共同墓地として土壙墓や甕棺墓などと共存する。

③ 石材の切り石面、割れ面が粗い。

④ 小型棺が含まれている。古墳時代には小型棺は少ない。

これらの特徴をみてみると、大原箱式石棺群はほとんどが当てはまり、より弥生時代の石棺墓に近かったことがわかる。封土に関しては、削平を受けている場合は判断できず、また本来は周溝墓であっても、溝が削平され、主体部だけ残っていた場合も、単なる単一石棺墓と判断されてしまうことになる。しかし、群集していれば、すべてに墳丘があったとは考え難い。また、小型棺が多いことも大原石棺群の特徴といえる。藤田等氏は箱式石棺を分類し、細長いタイプをⅠ型、正方形に近いものをⅡ型とした(藤田 1996)。



第 29 図　県内における箱式石棺の分布（墳丘をもたないもの）

（『宮崎石棺墓群』1990 に追記）

このような小型の石棺は、壱岐・対馬を除く西北部九州に分布するとされ、吉野ケ里遺跡などでも甕棺墓群に混じって出土している。県内では天草など八代海沿岸に分布しており、大きさから小児用か再葬の可能性も考えなくてはならない。

箱式石棺に使用される石材は、安山岩板石がほとんどであるが、宇土半島から天草地域にかけては砂岩が多く、菊池川流域では凝灰岩が使用される場合がある。地域の地質の特徴が表れているが、確かに玉名市内においても、古墳時代の場合、赤禿古墳や馬出古墳の箱式石棺が凝灰岩製である（第 28 図参照）。

次に副葬品が出土した箱式石棺墓をみた場合、菊池川流域では南関町に所在する大場石棺群がある。ここでは箱式石棺墓が 4 基検出され、石材として凝灰岩を使用しているのが特徴的である。棺内寸法は、約 1.7m×0.4mで、棺内には白色粘土が目貼りされていた。1 号墓からは、破鏡が検出されている。破鏡が棺内から出土する場合、頭の右側側面に置かれている場合が多いことから、この石棺は南側が頭位だったと想定されている。破鏡は、白色粘土の上部に鏡背を表に、鏡辺部を上にして検出された。研磨され穿孔がある飛禽鏡の破鏡で、時期は弥生時代後期末と考えられている。菊池川下流域（玉名郡内）の弥生時代においては唯一、墳墓から出土した青銅器になる。

また、山鹿市の方保田東原遺跡は県内屈指の拠点集落とされているが、多くの住居跡と共に数基の箱式石棺墓が確認されている。白石地区では 6 基の箱式石棺が出土しており、土壙墓と共存していたようである。石棺はすべて組み合わせ式で、石材は安山岩と凝灰岩が使用されている。この 3 号石棺墓も凝灰岩の板石が組まれており、全長は 1.26mで幅が 0.3m であった。鏡はいわゆる小型仿製鏡（内行花文鏡）で背面を下にして検出された。直径は 9 cmで、前漢鏡の日光鏡を模したものとされている。この他、付近の破壊された石棺からも約 3 cmの鏡片が採集されている。

その他、阿蘇地域では狩尾遺跡群の箱式石棺墓から破鏡（神獣鏡片）、ガラス玉 22 点、管玉 3 点が出土、下山西遺跡の箱式石棺墓 3 基からそれぞれ鉄剣が出土している例がある。天草地域の宮崎石棺墓群 11 号棺からも鉄剣 3 点、鉄鏃 4 点、20 号棺からも鉄剣 1 点、鉄鏃 1 点が出土している。このように県内では箱式石棺墓から青銅器では鏡、鉄器では鉄剣、鉄鏃、刀子などの出土傾向がある。

珍しい例としては、熊本市北部町に所在する八鉾神社の参道拡張工事（昭和 32 年実施）に伴い、箱式石棺墓が出土し乙益重隆氏によって緊急調査され、棺内から銅戈の先端部分（17.9 cm）が検出された。当初から欠損したまま副葬されたと考えられており、先端は丸みを帯びており薄く、鎬はない。時期は弥生時代後期とされる。本来は約 30 cmの中細形銅戈とみられるが、箱式石棺墓に副葬された青銅器として珍しい例である。

8　総括　―大原箱式石棺群の特性とその意義―

これまで、当石棺群の調査結果を概要報告としてまとめてきたが、緊急調査ということもあり石棺墓として墓壙のプラン検出がされておらず、明確な切り合いや側石の下部構造など不明な点があるのは否めない。そのような中で当石棺群の特徴を明確化したい。

まず、下表に示したとおり石棺群の規格、形状等をまとめると、最も大きな石棺は長さが1.75m、幅が0.65mであり、その平均値は長さ1.33m、幅0.45mであった。この規格は県内の小野崎遺跡など長さが約2mある石棺に比べると、小ぶりといえるかも知れない。しかし、大原石棺群の場合、線刻画や副葬品がある石棺が特に大きいということができる。また、これらは石材の使用数も多く、床石も前面に貼るなど丁寧なつくりがみられる。その一方で、小型のものでも床石が前面に貼られたものが存在する。そこで、石棺の規格に応じて以下のように分類した。

①Ⅰ－a型……全体形状が細長く、長さが1m以下の石棺
②Ⅰ－b型……全体形状が細長く、長さが1m以上の石棺
③Ⅱ－a型……全体形状が正方形に近く、長さが1m以上の石棺
②Ⅱ－b型……全体形状が正方形に近く、長さが1m以下の石棺

この4種類に分類すると、最も多いのはⅠ－b型で成人用と考えることができる。ここで問題になるのがⅡ－a型に分類される10号棺で、正方形に近いが1m近いというタイプである。これは単純に小児用とはいえず、床石も前面に敷くなど丁寧なつくりとなっている。配置をみても、線刻画や鉄鏃が確認された9号棺と接しており、方向も一致していることから、同時期の埋葬や親族関係であったことも考えられる。当然、親族の再葬もありえる。

使用石材はすべて安山岩板石で産地は不明であるが、玉東・天水方面などが想定される。板石状の石材は、ほとんどが自然石とみられ、剥落したものなどを採取したと考えられるが、厚さは薄いものから、15㎝程のものもある。比較的厚いものはⅠ－a型の小型タイプに使用される傾向がある。

主軸方向については、南北、東西とも統一性がみられず、どちらかといえば地形や住居跡との位置関係、木棺墓を囲むような配置が見て取れる。特に未報告である南側のB区には、長さが約6mの大型木棺墓が検出されているが、これを方形状に囲むように石棺墓群、敷石などが検出されている。この空間に封土（墳丘）も想定され、大型木棺墓を主体部とした墳丘墓であった可能性もある。

	長さ	幅	高さ	石材	石材数	床石	分類	方向	備考
1号棺	0.95m	0.4m	0.18m	安山岩板石	11	○	Ⅰ－a型	北東-南西	
2号棺	0.70m	0.27m	0.15m		7	○	Ⅰ－a型	東西	
3号棺	—	0.33m	0.25m		残存3	—	—	南北	一部破壊
4号棺	0.64m	0.32m	0.26m		11	◎前面	Ⅰ－a型	東西	
5号棺	—	—	—		—	—	—	南北	破壊著しく、復元なし
6号棺	—	—	—		—	—	—	南北	
7号棺	1.70m	0.40m	0.40m		17	◎前面	Ⅰ－b型	東西	蓋石、壮年・男性人骨残存
8号棺	1.55m	0.44m	0.32m		22	○	Ⅰ－b型	東西	
9号棺	1.70m	0.45m	0.35m		40	◎前面	Ⅰ－b型	南北	線刻画あり、鉄鏃出土
10号棺	1.15m	0.65m	0.35m		25	◎前面	Ⅱ－a型	南北	
11号棺	1.65m	0.40m	0.25m		13	○	Ⅰ－b型	北西-南東	
12号棺	1.60m	0.40m	0.30m		10	○	Ⅰ－b型	北東-南西	
13号棺	1.75m	0.50m	0.30m		15	○	Ⅰ－b型	北東-南西	蓋石、刀子・勾玉出土

第1表　大原箱式石棺群の石棺墓一覧

前章で述べたとおり、木棺墓では水銀朱が確認されており、その他の石棺墓はベンガラであったことからも、木棺墓が特殊で石棺墓よりも優位であったのかもしれない。この傾向は菊池市の小野崎遺跡における墓域からも伺える。菊池川上流域に位置する弥生時代後期の小野崎遺跡では、木棺墓が極めて多く、主流であったとみられ、数が少ない箱式石棺墓から副葬品は検出されず、木棺墓から鏡が出土している。大原石棺群の北側に位置する東南大門遺跡でも、箱式石棺墓が 1 基確認されているが、その付近には大型木棺墓が存在し、墳丘墓の可能性が指摘されている。ここでは周溝状の途切れた溝も検出され多量の土器が出土している。弥生時代終末期より、古墳時代への過渡期になるほど木棺墓が大型化し、甕棺墓→石蓋土壙墓→石棺墓から大型木棺墓へと墓制が変化してより優位になっていくものと考えられる。

このように同時期の箱式石棺墓などと比較してみると、大原箱式石棺墓の意義がより明確になる。第一に菊池川流域においてもこれほど群集する石棺墓群は例がない。県内でも 5 基以上がまとまった石棺墓の共同墓地は宇土半島基部から天草にかけての八代海沿岸に集中するものの全体の本調査例が少なく、詳細がわからないのが現状である。紹介した阿蘇地域のように集落から少し離れて 3～4 基ほどが群集し、勾玉・ガラス玉など副葬品をもつように、大原石棺群も当初は集落のなかの有力者層の墓地であったことは相違ないようである。蓋石が残存していた石棺から副葬品が出土しているため、後世の攪乱や盗掘を受けていなければ副葬品が残存していたことも否定できない。第二に線刻画をもつ箱式石棺墓としては県内でも例がないことである。弥生時代でいえば絵画土器は県内でも認められ、墳墓では甕棺に線刻画がある例がある。よって、装飾古墳というよりは、甕棺などの線刻画からの系譜が認められそうである。今後は、どのようなルートで大原遺跡周辺に石棺墓が流通してきたのか、天草など海岸域からなのか、阿蘇地域の山地からなのかなどを解明できればと考える。いずれにしても、菊池川流域や中九州において弥生時代の墓制を考えるうえで、大原箱式石棺群の群集する石棺墓は大変意義が大きい。

なお、本市岱明町の今泉遺跡は丘陵全体未調査地帯であるが、地元では「百塚」の呼び名があり、かつては多くの塚があったといい、工事中に箱式石棺が２基確認されている。現在も、弥生後期の土器片が多量に露出している地点があり、今後も注意しながら調査していく必要がある遺跡も多い。また、大原 B 区の箱式石棺や大型木棺墓の未整理分の課題などが多く残されている。

【参考文献】

田添夏喜「大原箱式石棺群」・「実測図」岱明町文化財指定資料　岱明町文化財保護委員会　1982

田添夏喜「弥生土器・高坏」岱明町文化財指定資料　岱明町文化財保護委員会　1982

田添夏喜「大原遺跡出土品実測図・写真」岱明町教育委員会　1968

田添夏喜「大原遺跡遺物発見届書類」岱明町教育委員会　1968

田添夏喜「大原 9 号石棺」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県教育委員会 1984

田添夏喜『浄光寺跡寺域確認調査』玉名市教育委員会　1989

田邊哲夫「玉名の歴史－縄文時代・弥生時代」『歴史玉名』玉名歴史研究会　1990

玉名市教育委員会編　玉名市文化財調査報告第 44 集『大原遺跡』玉名市教育委員会　2020

内藤芳篤「大原箱式石棺群第 7 号石棺人骨について」『肥後考古』第 6 号　肥後考古学会 1983

河北　毅「菊池川下流域の弥生土器」『肥後考古』第 4 号　肥後考古学会 1983

高木正文「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 80 集　1999

志賀智文「玉名市から出土した赤色顔料について」玉名市文化財調査報告第 44 集『大原遺跡』玉名市教育委員会　2020

田添夏喜「滑石小路箱式石棺」玉名市文化財調査報告第 6 集『滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡』玉名市教育委員会　1985

玉名市教育委員会編　玉名市文化財調査報告第 36 集『塚原遺跡Ⅰ』玉名市教育委員会　2017

玉名市教育委員会編　玉名市文化財調査報告第 8 集『東南大門遺跡』玉名市教育委員会　2001

玉名市教育委員会編　「赤禿古墳」玉名市文化財調査報告第 33 集『玉名市内遺跡調査報告書Ⅸ』玉名市教育委員会　2017

天水町教育委員会編『大塚古墳』天水町文化財調査報告第 2 集　天水町教育委員会　2001

藤田　等「石棺墓」『弥生文化の研究 8－祭と墓と装い』1996

宮崎敬士「大場石棺墓群」『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会　1996

岩崎充宏編『宮崎石棺墓群』宮崎石棺墓群調査団　1990

写真図版

1　　大原7号石棺墓　出土状態

2　　7号棺内の人骨出土状況（東より）

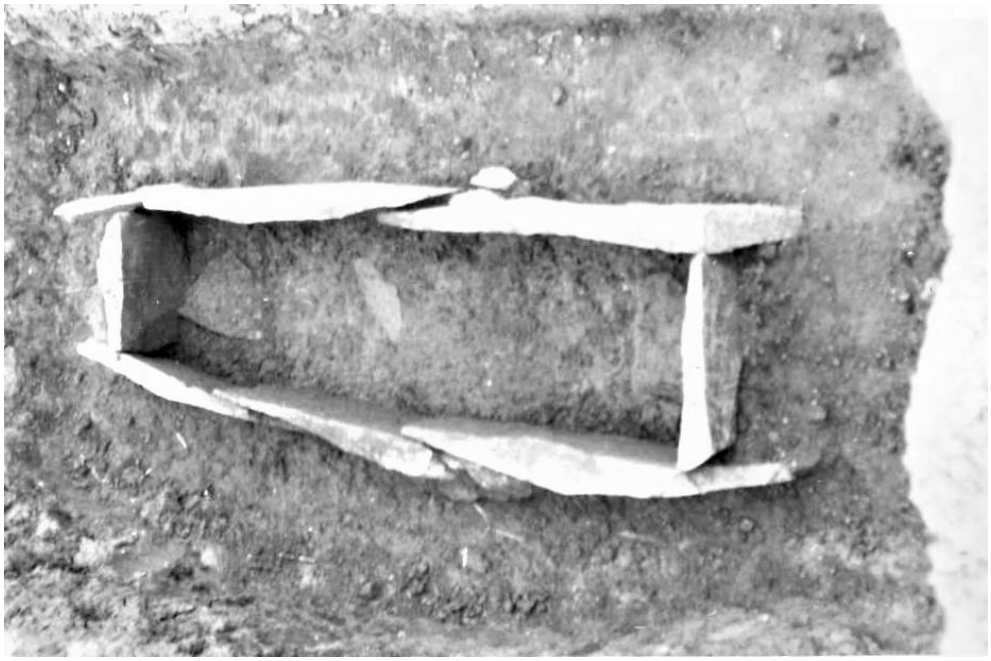
3　　9号（左）及び 10号石棺墓　出土状況

4　　9号石棺墓　棺身（東より）

5　　10号石棺墓（小型棺）

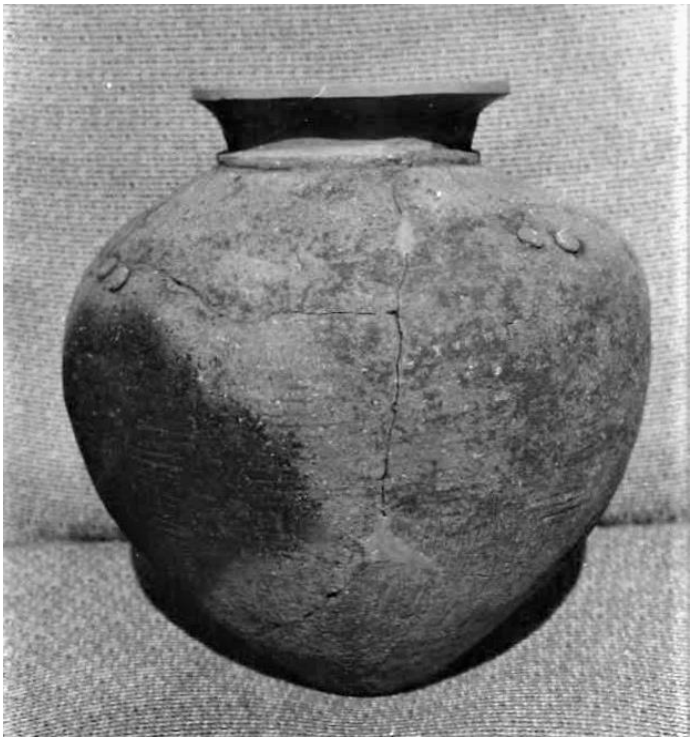
6　　11号石棺墓検出状況

7　　12号石棺墓



8　　13号石棺墓 棺身

9　　13号石棺墓　床面清掃後（東より）



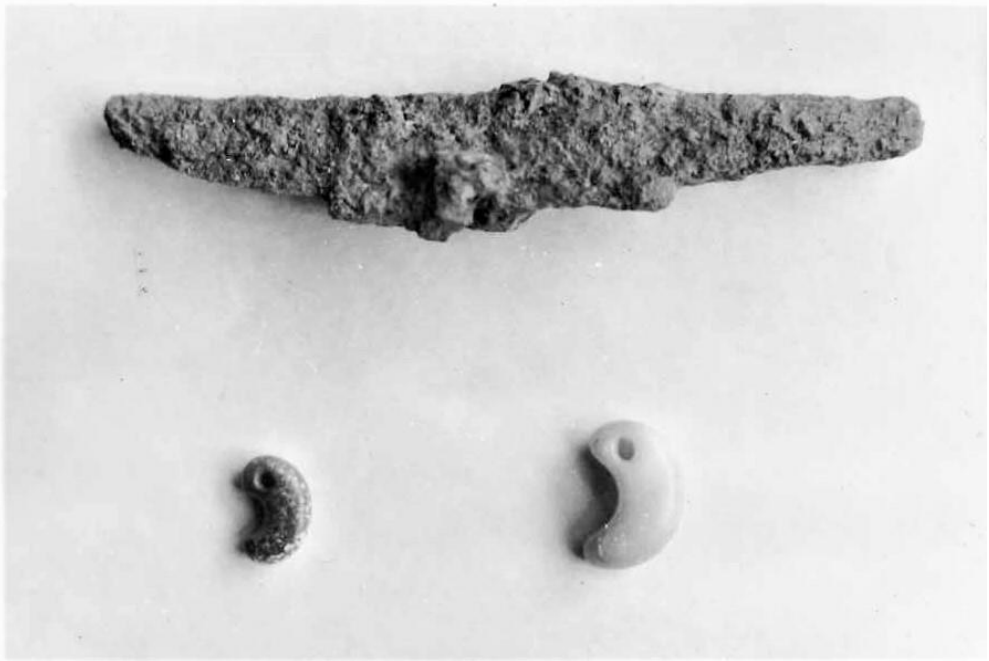
10　　壺（弥生土器）

11　　壺の出土状態

12　　住居跡出土の高杯 脚部（杯部欠損）

13　　鉄鏃（先端欠損）9号石棺墓内副葬

14　　9号棺の鉄鏃　出土状態



15　　刀子 及び 勾玉　　13号石棺墓内副葬

16　　大原遺跡の住居跡遺物出土状況

17　　大原遺跡の住居跡出土の弥生土器

18　　大原遺跡の住居跡出土の弥生土器

19　　大原箱式石棺群（移設後の現況・西から）

20　　大原箱式石棺群（移設後の現況・東から）

21　大原箱式石棺群（移設復元状況）

22　大原箱式石棺群（移設復元状況）

23　大原箱式石棺群（移設復元状況）

9号石棺出土の鉄鏃

13号石棺出土の刀子

B区8号石棺出土のガラス玉

住居跡出土の鉄鏃

24　大原箱式石棺群出土遺物

25　大原箱式石棺群などの出土遺物展示状況（玉名市岱明町公民館）

26　大原遺跡の航空写真（北東から）

玉名市文化財調査概報

大 原 箱 式 石 棺 群

―玉名市岱明町野口における採土掘削工事に伴う緊急発掘調査の記録―

【令和6年度再編集版】

令和6年9月

玉名市教育委員会